市内遺跡詳細分布調査事業

ますみヶ丘・福島地籍
(舟窪西遺跡)

埋蔵文化財分布調査報告書

1994.3

伊那市教育委員会

市内遺跡詳細分布調査事業

ますみヶ丘・福島地籍
(舟窪西遺跡)

埋蔵文化財分布調査報告書

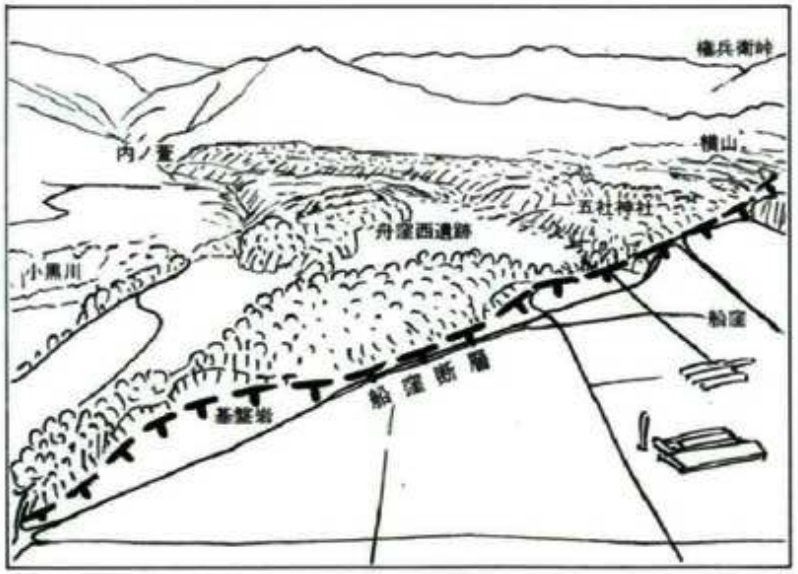
1994.3

伊那市教育委員会

1

2

3



序

平成４年度の緊急調査の目的で、ますみヶ丘地籍と福島地籍の分布調査（試掘を伴う）を実施いたしました。

今回の調査において、福島地籍からは遺構・遺物の検出がなく成果が上がりませんでした。しかし、ますみヶ丘地籍においては平安時代の住居址２軒が確認され、緑釉陶器をはじめとして多くの遺物も出土しました。伊那市としては久し振りの新遺跡発見であり、文化庁に「舟窪西遺跡」として遺跡発見の通知を提出しました。

近年において開発事業などの数は増加の一途をたどっている中で、埋蔵文化財の保護は大変むずかしい問題となってきております。私たちは、それら開発事業に迅速に対応するため分布調査を行い、その結果を記録に残し、今後の埋蔵文化財保護の充実のために生かしていかなければなりません。

このたびのますみヶ丘地籍・福島地籍における分布調査では、地権者の方々の深いご理解とご協力をいただき、無事調査ができましたことに心より感謝を申し上げます。また、県教育委員会文化課の方々のご指導をいただき、分布調査団長の友野良一先生をはじめ、調査員の先生方、作業員のみなさんのご努力により、ここに報告書を刊行するはこびとなりました。ご協力をいただいた方々に感謝申し上げるとともに、この報告書が今後教育文化の向上に活用されることを願っております。

平成６年３月

伊那市教育委員会

教育長　宮下安人

例　言

1．本書は、平成４年度に実施された埋蔵文化財分布調査の報告書である。

2．この分布調査は、伊那市教育委員会が遺跡分布調査団を編成し、分布調査団に事業を委託して実施した。

3．調査はますみヶ丘地籍及び福島地籍において実施された。

4．本書の執筆者及び図版制作者は次のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章第１節	早川　宏・田中　章
第Ⅱ章第２節	松島信幸
第Ⅱ章第３節	友野良一
第Ⅲ章第１節	早川　宏・田中　章
第Ⅲ章第２節	友野良一
第Ⅳ章第１節	早川　宏・田中　章
第Ⅳ章第２節	友野良一
第Ⅴ章	友野良一
図版制作	友野良一・松島信幸・田中　章
写真撮影	友野良一・松島信幸・早川　宏

5．本書の編集は、主として伊那市教育委員会が行った。

6．出土遺物及び実測図類は、伊那市考古資料館に保管してある。

目　　次

口　絵　右　船窪遠景
　　左上　船窪断層の断層崖に顔を出している基盤岩
　　「岩石は領家帯のホルンフェルスで、泥質岩とその間に入り込んだ石英脈、いずれも著しい変形と風化が進んでいる。」
　　左下　緑釉陶器
序
例　言
目　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　分布調査の経緯
　第1節　分布調査に至るまでの経過 …… 1
　第2節　調査会の組織 …… 1
　第3節　分布調査の経過 …… 2

ーますみヶ丘地籍ー
第Ⅱ章　調査地籍の環境
　第1節　分布調査の位置 …… 7
　第2節　地形及び地質 …… 8
　第3節　歴史的環境 …… 12
第Ⅲ章　調　査
　第1節　調査の概要 …… 25
　第2節　遺構と遺物 …… 25
まとめ

ー福　島　地　籍ー
第Ⅳ章　調査地籍の環境
　第1節　分布調査の位置 …… 53
　第2節　歴史的環境 …… 53
第Ⅴ章　調査の概要 …… 55
図　版
参考文献

挿 図 目 次

ーますみヶ丘地籍ー

第1図　分布調査の位置(1/50,000) …… 7
第2図　小黒川扇状地の全体図と船窪の位置 …… 8
第3図　船窪地域の地形面区分と船窪断層 …… 9
第4図　小黒川扇状地を構成する地質柱状図 …… 10
第5図　船窪断層と断層による変動地形 …… 11
第6図　平安・中世遺跡分布図(1/50,000) …… 17
第7図　調査範囲設定・平面実測図(1/1,000) …… 19
第8図　グリッド調査実測図(1/200) …… 21
第9図　AH2・AL1 トレンチ調査実測図(1/60) …… 23
第10図　第1号住居址実測図(1/40) …… 26
第11図　第1号住居址出土遺物実測図 …… 27
第12図　第2号住居址実測図(1/40) …… 28
第13図　第2号住居址出土遺物実測図 …… 29
第14図　グリッド出土遺物拓影 …… 30
第15図　表面採集遺物拓影 …… 31
第16図　表面採集石器実測図 …… 32
第17図　表面採集石鏃実測図 …… 33

ー福　島　地　籍ー

第18図　分布調査の位置(1/50,000) …… 53
第19図　調査範囲平面及び調査実測図(1/1,000) …… 54

図 版 目 次

ーますみヶ丘地籍ー

図版1　ますみヶ丘地籍調査か所全景
図版2　グリッド調査状況
図版3　上　AH－2トレンチ
　　中　AI－1トレンチ
　　下　AI－2トレンチ
図版4　上　AJ－1トレンチ
　　中　AJ－2トレンチ
　　下　AK－1トレンチ
図版5　上　AK－2トレンチ
　　中　AL－1トレンチ
　　下　AL－2トレンチ
図版6　上　第1号住居址
　　下　第2号住居址
図版7　上　1号住居址カマド・遺物出土状況
　　下　2号住居址カマド・遺物出土状況
図版8　第1号住居址出土遺物
図版9　第2号住居址出土遺物
図版10　上　第2号住居址出土灰釉皿
　　中　グリッド出土遺物・表面採集遺物
　　下　表面採集遺物（土器）
図版11　表面採集遺物（石器）
図版12　上　表面採集遺物（石鏃）
　　下　発掘調査団と教育委員会事務局

ー福　島　地　籍ー

図版13　上　福島地籍調査か所全景
　　下左　第1トレンチ
　　下右　第2トレンチ
図版14　グリッド調査状況

第Ⅰ章　分布調査の経緯

第1節　分布調査に至るまでの経過

平成4年1月　市内遺跡分布調査を平成4年度文化財関係補助事業として、計画書を提出。
6月　平成4年度文化財関係国庫補助事業計画の内定。
平成4年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書の提出。
9月　平成4年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知。
3月　委託契約を締結。

第2節　調査会の組織

伊那市教育委員会

委員長	小田切　仁	
委員長代理	兼子康彦	(平成4年度)
	小坂栄一	(平成5年度)
委員	岸　敏子	
委員	小松光男	
教育長	宮下安人	
教育次長	有賀博行	

事務局

社会教育課長	小田切　修	(平成4年度)	
	橋爪英峯	(平成5年度)	
社会教育係長	林　俊宏		
青少年教育係長	渋谷　勝		
社会教育係	浦野節子	城倉三喜生	早川　宏
	有馬善子	山口加代	有賀　恵
	長谷川紀子	田中　章	

分布調査団

団　　長	友野良一	(日本考古学協会会員)
調査員	松島信幸	(第四紀学会会員)
	寺平　宏	(第四紀学会会員)

作業員	柴　佐一郎	熊谷久行	小田切守正
	大久保富美子	酒井とし子	大野田　英
	埋橋程三	堀内茂重	唐沢政孝
	奥田友美	酒井正之	飯島正直
	酒井幸子	田中多鶴子	春日泰子

第3節　分布調査の経過

日　　誌

平成4年度

－福島地籍－

7月22日　発掘機材を伊那市考古資料館より運搬し、現場へ搬入。テント設営。
試掘トレンチ・グリッドの設定を行う。

23日　第1・2トレンチ掘り下げを行う。

24日　第1・2トレンチ断面実測及び写真撮影を行う。
EN1～4、ES1～4、WN1～3、WS1～2グリッド掘り下げを行う。

25日　WN4～8、WS3～8、EN5～7、ES5～7グリッド掘り下げを行う。

28日　EN5～7、ES5～7グリッド掘り下げを行う。
WN1～4、WS1～3、EN1～4、ES1～4写真撮影を行う。

29日　WN6～8グリッド掘り下げを行う。グリッド断面レベル測量を行う。
WN5～8、WS4～6、EN5～7、ES5～7グリッド写真撮影を行う。

30日　グリッド断面実測を行う。

31日　WN9～13、WS7～10グリッド掘り下げを行う。

8月3日　WN7～13、WS7～10グリッド断面実測及び写真撮影を行う。
グリッド位置測量を行う。

8月4日　埋め戻しを行う。

5日　発掘器材の片付け搬出を行い、現場における調査を全て終了した。

ーますみヶ丘地籍ー

3月12日　発掘機材を伊那市考古資料館より運搬し、現場へ搬入、整備を行う。
調査範囲内において表面採集を行う。縄文土器片、平安陶器片、黒曜石、石器などを採集することができた。

15日　グリット設定の打ち合わせをし、基準点を設置する。

16日　グリッドを設定。O－2～9グリッド掘りを行う。

17日　P－2～8グリッド掘りを行う。

18日　Q－2～9グリッド掘り、Q－5より縄文土器1片出土。P－2～8断面実測及び写真撮影を行う。

19日　R－2～9・S－2～10グリッド掘り、R－7・S－6より縄文土器1片出土。O－2～9・R－2～掘9断面実測及び写真撮影を行う。ますみヶ丘の空撮を行う。

22日　F－1～3・K－1～3・M－2～5グリッド堀り、R－2～9・S－2～10断面実測及び写真撮影を行う。

23日　F－1～3・K－1～3・M－2～5断面実測及び写真撮影を行う。AH－2トレンチ設定掘り下げを行う。

24日　AH－2トレンチの掘り下げを行う。

25日　AH－2トレンチの掘り下げを行う。住居址検出、第1・2号住居址とする。
AI－1トレンチの掘り下げを行う。

26日　第1号・2号住居址の掘り下げを行う。第1号住居址の遺物拾い上げ及び写真撮影を行う。2号住居址より緑釉・灰釉陶器皿の出土があった。
AI－2・AJ－1・AJ－2・AK－1・AK－2・AL－1・AL－2トレンチの掘り下げを行う。

28日　第1号住居址の平面実測を行う。

29日　第1号住居址の断面実測、写真撮影を行う。第2号住居址の平面実測を行う。

30日　トレンチの埋め戻し作業を開始する。第2号住居址の断面実測を行う。

31日　トレンチの埋め戻し作業を終了し、現場における調査を全て終了した。

平成５年度

７～８月　　報告書作成のため整理作業を行う。

１～２月　　報告書作成。

分布調査に深いご理解とご協力をいただいた方々に心より感謝申し上げる次第であります。

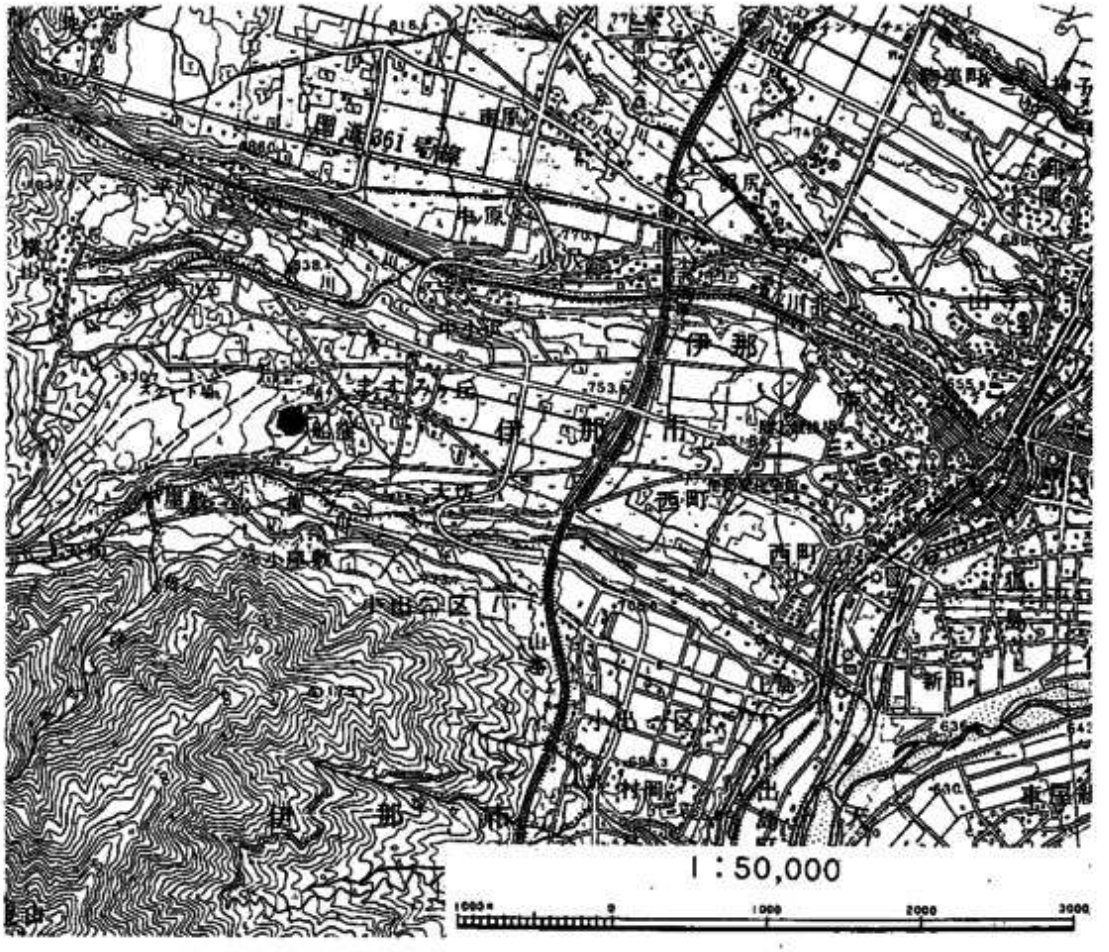
ますみヶ丘地籍
（舟窪西遺跡）

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　分布調査の位置

今回調査したのは、長野県伊那市大字伊那ますみヶ丘地籍で、その内でも南西部に位置する。この地籍に至るには、ＪＲ飯田線伊那市駅前から伊那合同庁舎前を通り、青木町の交差点を左折する。交差点を左折し、400m程行き坂道を上りきると、右手に荒井神社があり、この三叉路を左折し西へ向かう。伊那中学校前を通り、ひとつめのＹ字路を左折、次のＹ字路を右折する。中央高速道路を越え、大型農道を横切りすぐのＹ字路を右折しさらに西に向かう。集落を過ぎて200m程行くと交差点がある。この交差点から南西の畑地帯が今回の調査の地籍となる。

舟窪は、小黒川左岸の台地段丘上の畑地帯に位置している。



第１図　分布調査の位置

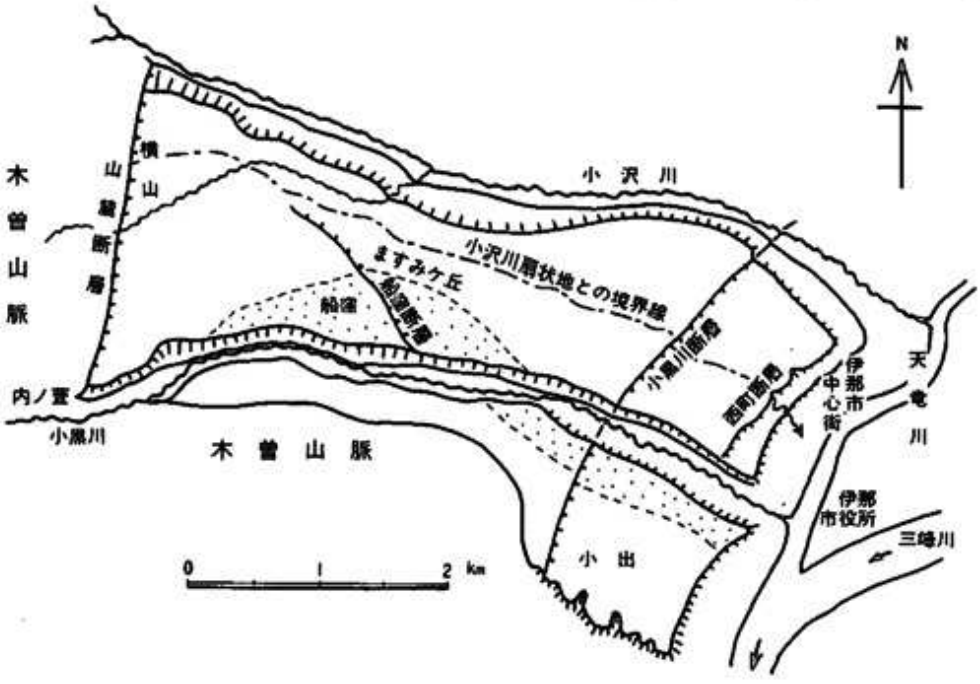
第２節　船窪地域地形・地質

１　平地林が残る船窪地域

船窪地域は小黒川扇状地のほぼ中央部に位置する。伊那市の中心部から真西へ4.5kmである。

本地域の南縁部には小黒川が、北側には小沢川が木曽山脈から天竜川に向って東西に直線状の流路をとっている。これらの河川は扇状地形成後の下刻作用によって、いわゆる田切地形となっており、侵食をまぬがれている扇状地面はきわめてゆるやかな起伏をもつ台地状の地形となっている。扇状地の西縁は木曽山脈で限られており、東縁は台地状の扇状地が天竜川に沿う低地帯に切られている。西縁の山麓線には横山の古い集落があり、東縁の天竜川に面した一帯が伊那市の中心街である（第２図）。

船窪地域はこうした台地状扇状地の中央やや西よりに位置して発達した集落である。広々とした扇状地上は火山灰や軽石まじりのテフラ層や黒土層によって厚くおおわれており、土壌条件が悪く、開発という面から見るとあまり手が入っていない魅力的な景観を保持している。水便に恵まれていないので畑や牧草地が多く、第二次対戦後の開拓地が多い。最近、広域農道が近くを通過したため、交通の便が良くなったりで、ゴルフ場を中心としたリゾート開発が計画され、問題となった地域である。しかし、船窪地域から山麓にかけては貴重な平地林が比較的広い面積で残存しており、伊那市にとってはもちろん、伊那谷の中でも景観上、また学術上、さらに船窪からますみヶ丘一帯の保水上の保全地域として再確認すべき重要な地域である。

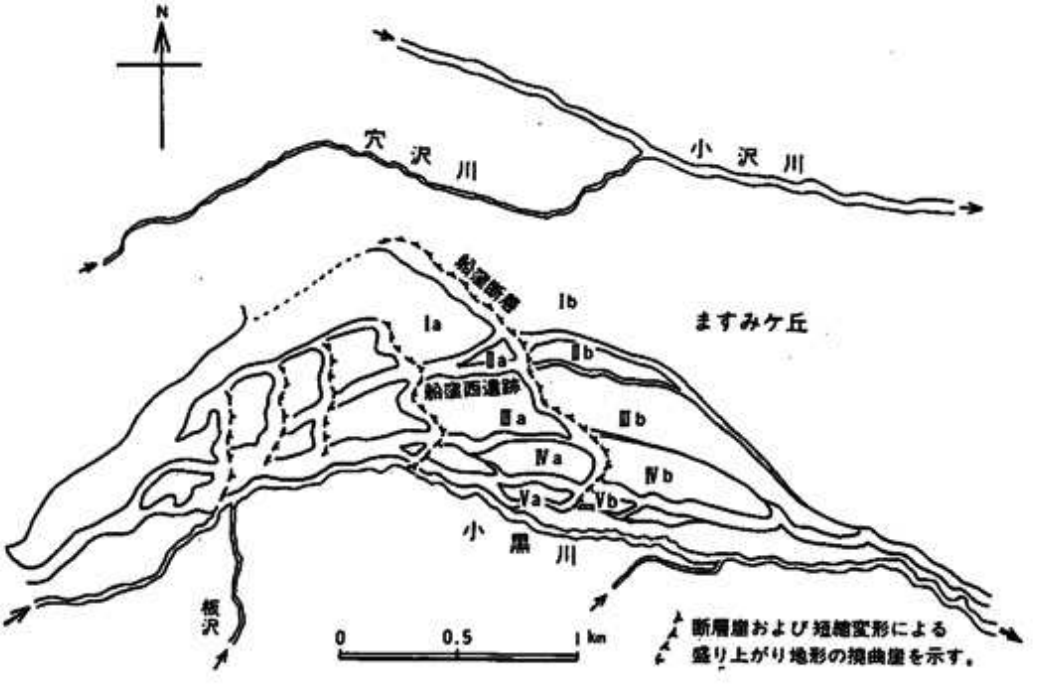


第２図　小黒川扇状地の全体図と船窪の位置

2　船窪地域の地形

船窪地域の北側に伊那市立伊那西小学校があり、周辺がますみヶ丘と呼ばれている。丘の名称にふさわしく、西から東へのびているゆるやかな高まりである。船窪の集落はこの丘を背にし、南側に開けた船形状の窪地である。この窪地も西から東へ向ってのびており、南のへりは小黒川に面した崖になっている。こうした地形は、小黒川扇状地を小黒川が開析していく過程でつくりあげた段丘状の地形であり、いわゆる扇状地開析段丘である。

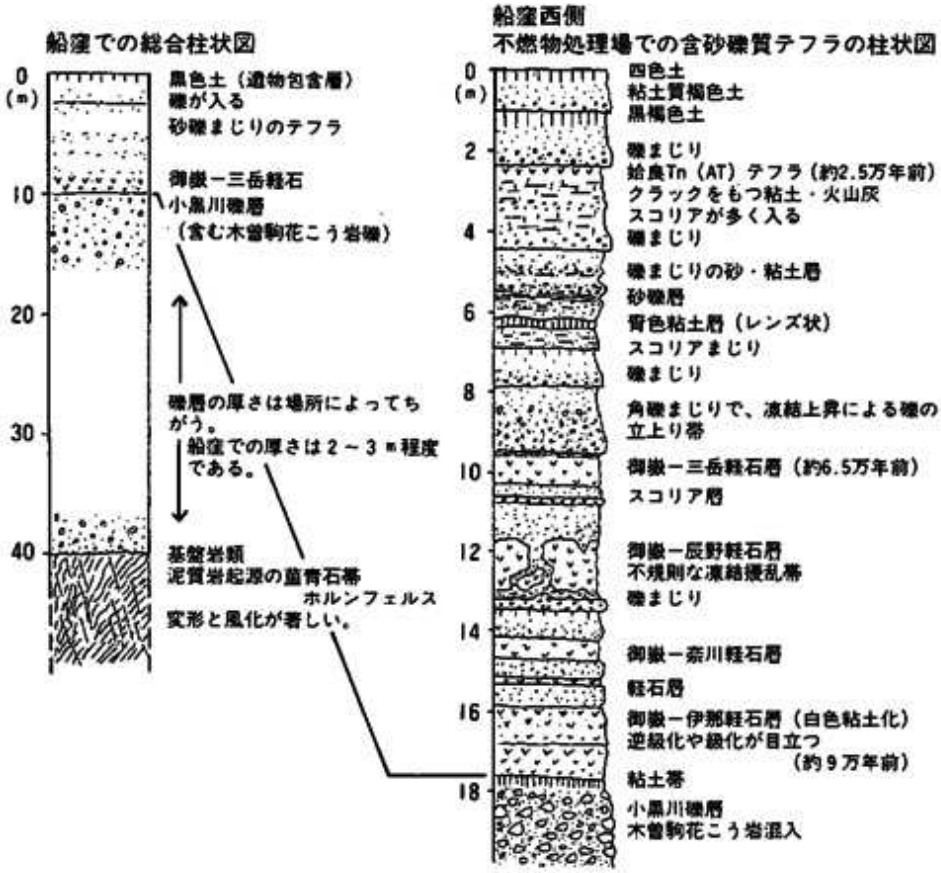
船窪の地形を子細に観察すると何段かの侵食面に分かれる。ますみヶ丘にくっついた方が高い侵食面で、小黒川に向って順次低くなっていく。これらの侵食面は4段に区分できる。さらに、船窪の中央部を横切って北西－南東方向に通過する船窪断層がある。この断層については後述するが、断層によって4段の地形面がすべて切られている。断層は西上がりで東落ちのため、断層により西側の舟窪西遺跡のある方が一段と高くなっており、東側の方が低い。こうして、現在の地形面は複雑に区分できる。調査した舟窪西遺跡はⅢａ面にあたる（第3図）。



第3図　船窪地域の地形面区分と船窪断層

3　船窪地域の地質

本地域は領家帯の変成岩である堇青石帯ホルンフェルスを基盤岩とし、その上に、小黒川扇状地礫層がのっている。この礫層は木曽山脈側から小黒川によって運び出されてきて堆積した砂礫層である。さらに、最上部には扇状地礫層をおおうテフラ層と黒色土層がのってくる（第4図）。



第４図　小黒川扇状地を構成する地質の柱状図

基盤岩は小黒川に面する侵食崖にあらわれている。とくに、小黒川右岸の小屋敷に面した崖下で模式的に観察できる。主として泥質岩起源のホルンフェルスである。ここの露頭では権兵衛峠からのびてきている境峠断層（神谷断層ともいう）の断層破砕帯があらわれており、著しく変形している。さらに注目したいのは船窪断層の断層崖下にも変形の著しい基盤岩が顔を出している。このことについては断層の項で述べる。

小黒川礫層は最厚30ｍの地層で、小黒川および城南町の崖で観察される。ホルンフェルスと木曽駒花崗岩を礫種として、最大礫は数10cmのものをわずかに含むが圧倒的に多いのは20cm以下の礫であり、亜円礫から亜角礫である。上方細粒化を示し、最上位の部分で風送水成型のテフラ層と互層している。テフラ層を礫層中にはさむことから、小黒川礫層の主体は10万年前ないしそれ以降の最終氷期を通じて堆積した地層である。

最下部のテフラ層は御嶽ー伊那軽石層より上部のものからなる。テフラ層は横山から鳩吹方面の山麓部に向って厚くなっている。これは、テフラ層と砂礫層とが交互にくりかえして堆積しているためである。伊那市不燃物埋立地においては御嶽ー伊那軽石層が２ｍの厚さとなり、

伊那谷では最大の層厚を示す。テフラ層の最上部の褐色土中には広域テフラの姶良Tnテフラ（ＡＴ）が１～２cmの厚さではさまれており、その上には黒色土（黒ボク土）が２ｍ余の厚さでかぶっている。

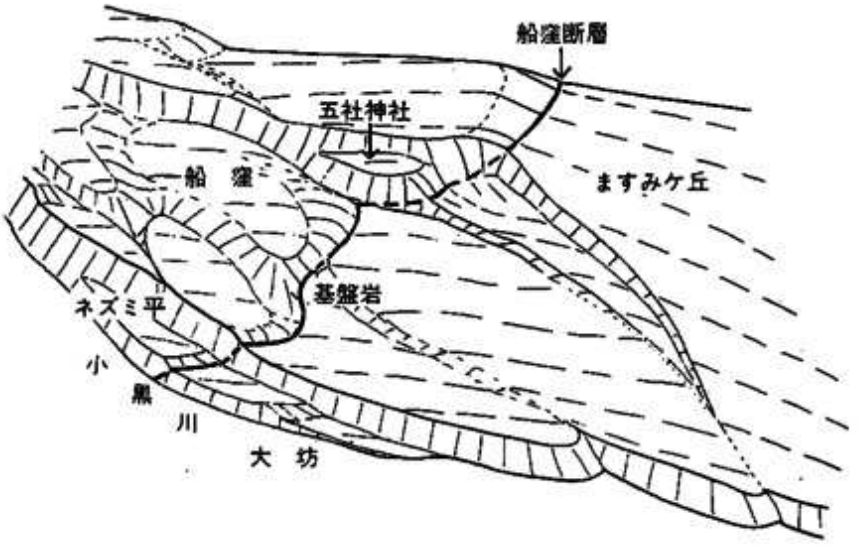
舟窪西遺跡では、これらのうち最上部の黒色土で占められている。黒色土の下側は礫まじりである。さらにその下側に礫まじりのテフラ層があらわれ、最下部は御嶽－三岳軽石層となる。テフラ層の層厚は約８ｍである。

4　注目すべき船窪断層について

船窪の中央部を横切るこの断層は船窪の五社神社東側から大坊方面に向ってのびており、断層崖線の直下を平行して農道がとおっているので観察が容易である（第５図）。しかし、衝上断層として地形を複雑に変形させているため、全体像を理解するには困難である。

舟窪西遺跡の台地直下の断層崖下には基盤岩が露出していて大変重要である（口絵写真中）。岩石は領家帯のホルンフェルスであり、著しい破砕変形を受けている。この変形は船窪断層による変形というより、当地域を通過している大規模断層である境峠断層の活動によるものであろう。

船窪断層は当地域の侵食面形成後に山地～盆地間の境界域に集中した短縮変形を受け、山地側が盆地側へ衝上したために生じた断層である。船窪断層の背面（山側）の地形に４段の盛り上がり地形が発達している。このような変動地形は短縮変形の結果として生じた波曲変形である。



第５図　船窪断層と断層による変動地形

第３節　歴史的環境

今回のますみヶ丘地籍の調査の折り発見された平安時代の住居址の歴史的な位置付けとして、かねてより考えていた伊那市の平安時代の遺跡を集計し、今後の伊那市の教育の一資料としたい考えである。

今日までの伊那市の古代史は文献による組立が主流となっていたが、近年の考古学の調査から文献では補う事のできない面を補足し、さらに内容の濃いものにしたいと計画して見た。

昭和５９年刊行の伊那市史（歴史編）にも縄文早期より中世初頭前までの遺跡の分布図が作成されているが、これを基準にし、その後発見された新資料を加え分布図を作成した。この資料の中から各地区の村々の状況を記し参考としたいと思う。

旧伊那地区では、小黒川上流の内の萱・ネズミ平遺跡にも平安時代の小集落が存在した。今回のますみヶ丘の舟窪西遺跡にもかなり大規模の平安時代の村が確認された。舟窪西遺跡の北にある横山地籍にも平安時代の遺跡が発見された。この横山地籍も舟窪西遺跡と同様山麓地帯の平安時代の村々である。そのほか、伊那地区では小黒川左岸段丘上の小黒原・伊勢並遺跡でもかなり大形の平安時代の村が発掘調査で確認された。また、小沢川の中流の左岸段丘上にある月見松遺跡にも平安時代の村が所在していることが発見された。伊那市の北側に位置している御園地区から伊那小学校までの間には、宮の前・御園南部・山寺・今泉・原垣外・鳥井原などの平安時代の村々が散在している。そのほか、西町地区では、弥生ヶ丘高校グランドに平安時代の住居址が伊那市教育委員会の平成４年度の調査により確認され、この付近にはかなり大形の平安時代の村が存在していたことも知り得た。これ以外に、小沢川の沖積小台地にも平安時代の村々が存在していたと考えられるが、現在では市街地化していて調査は困難である。今後の研究に待ちたいものである。

伊那竜東地区のうち、古町の天竜川と三峰川の段丘上には６世紀代の古墳群が上牧から福島地区まで天竜川の左岸段丘上と段丘中段に渡って分布しているところより、古墳時代の人々の生活基盤を基にして平安時代に受け継がれていったと考えられる。その代表的な遺跡は福島遺跡である。この福島遺跡には古墳時代の集落から奈良・平安時代の住居址が分布していた。この中段位の遺跡は天竜川の沖積台地へと暫時拡大していった。これが現在の福島部落である。

手良地区では、伊那山脈より流れ出る「カニ沢」の中流付近に、ワランンベ・狐垣外・辻垣外・金山鳴神・丸山などの平安の村が発見されている。手良の中央部付近では中原・小萩原・砂場・大原・松太郎久保・南垣外・角城などの諸遺跡が圃場整備事業とそれに伴う道路工事で発見され、手良の郷の古代史の貴重な資料を得ることができた。また、手良北部では、辻西幅・山の田遺跡に平安時代の村が発見された。この付近には中世の城郭等や古墳なども存在しているところより、おそらく、古墳時代を基として奈良・平安の村へと発展して今日に至ったと思われる。

美篶地区の考古学調査では、笠原の堤南、富士塚下遺跡だけに平安時代の村が確認されているだけであるが、この笠原は信濃国の「御牧」の一つで笠原の牧の置かれた所である。一志茂樹氏は天長4年（827）には千匹頭数がいたが、貞観18年（876）には2274匹と倍増していると（信濃Ⅱ4）発表している。『伊那市史』に『延喜式』の笠原牧は美篶笠原の地に置かれた勅旨牧であると書かれている。

笠原には現在平安時代の遺跡は1箇所だけしか発見されていないが、笠原部落は地名などから平安時代の村であったことは確かであると考えられる。

富県地区は、『倭名類聚抄』で知られている「福地郷」の地域である。しかし、どの場所にどの様に村々が存在したかは文献の上からは明らかになっていないので、伊那市は圃場整備や道路工事などの折には出来得る限りの発掘調査を行ってきたその結果、八人塚・小御堂・高岱・羽根原・三ッ木・根木谷中畑・御殿場の宮の花等の諸遺跡が平安時代の遺物を出土する遺跡であることを確認することができたが、このほかにも、これら遺跡と同一条件をもった村落など、現在は畑や原野になってはいるが、これらは平安時代の集落があったと考えられる場所が多い。そのほか、御殿場付近の台地や沼地周辺には古い居館跡が点々と存在しているので、貝沼・桜井などは平安時代の集落があったと考えてもよい地域である。

東春近地区は、中世初頭の春近郷の中に当る地域と考えられる。この地域の天竜川左岸段丘上には上殿島から中・下殿島そして田原部落にわたって、上伊那の古墳では一番多い古墳群が分布している。これだけの古墳の築造に関わる人々の住居は、果して何処に所在したのであろうかと何時も疑問がわいてくる地域である。天竜川の沖積地が生活に用いられたのは弥生時代からであるから、おそらく、段丘上が主要地であったろうが、時代が過ぎるにつれ、沖積平地に移って行ったものと考えられる。現在調査の結果から上殿島の老松場、中殿島では本城遺跡はかなり大形の平安時代の集落であったことが確認された。また、本城は中世の城が設けられた場所でもある。下殿島では古寺・駒形などにも発見されている。田原地籍では一本松・宮ノ上・男塚・上の段等にも平安時代の村のあったことが調査で確認されている。

西春近地区では、伊那市中で一番多くの平安時代の遺跡が44箇所も発見された。このことは、中央道開通時とそれに続く圃場整備や大規模農道工事などが行われた結果これだけ多くの平安時代の村を確認することができたといえる。中央道の調査では、山本田代・城平上・城平・常輪寺平・山の根・大境・山寺垣外・白沢原・名廻・名廻南・南丘B・南丘A・菖蒲沢・富士山下・和手遺跡等14遺跡が山麓沿いに発見され、縄文時代早期から平安時代に至る遺跡として注目された。

大規模農道での調査では、小出城（南）・宮の原・浜射場・児塚・南村・山の下・広垣外Ⅰ・広垣外Ⅱ・宮入口・和手南遺跡等9遺跡の調査が行われて、西春近の中段部の平安時代の村々の所在が明かとなった。その他の村々の発見は圃場整備によって発見され、大規模農道から東天竜の段丘上までの間に21遺跡が調査された。西春近地区は中央道・大規模農道・圃場整備な

どの諸工事に伴いこれだけの平安時代の村々（古代の「保」）を確認できたことは伊那市の古代史の研究に大きく貢献することと思う。

西箕輪地区は西春近地区と同様な山麓地帯に分布している村である。経ヶ岳に南面する多くの大小の谷から流出する川と山麓沿に分布している。金鋳場（緑釉陶器出土）・上溝遺跡を中心に発展した平安時代の村であったと考えられる。近くには平安時代に開基されたと伝えられる仲仙寺もある。大萱では、在家遺跡がある。「在家」という地名は平安時代を代表する地名として注目される。遺跡名としては初見ではなかろうか。そのほか、山麓沿いには殿屋敷・堂洞・上の原・堀の内・溝畑などの諸遺跡が分布している。これら平安時代の村々は、現在の西箕輪の村々の根源を辿るに相応しい村ではないかと考えられる。

第1表　平安・中世の遺跡一覧表

No.	遺跡番号	遺跡名	平安時代					中世	備考	No.	遺跡番号	遺跡名	平安時代					中世	備考
			土師	内黒	須恵	灰釉	緑釉						土師	内黒	須恵	灰釉	緑釉		
1	5	久保田	○		○	○				22	51	月見松	○		○	○		○	中世城館跡
2	12	金鋳場	○		○	○	●			23	53	小沢原						○	井戸跡
3	14	上溝	○		○	○				24	58	おぐし沢	○			○		○	
4	15	大萱	○							25	60	丸山清水	○		○	○			
5	18	在家	○		○					26	61	天狗上				○			
6	19	富士塚	○		○	○		○		27	63	ますみケ丘						○	
7	20	熊野神社			○	○				28	64	ますみ船窪	○		○	○		○	
8	21	殿屋敷						○		29	68	上の山	○		○	○			
9	22	堂洞	○		○					30	69	ウグイス原	○		○	○			
10	23	上の原	○		○					31	71	山の神	○		○	○		○	
11	26	堀の内						○	中世城館址	32	72	伊勢並	○		○	○		○	
12	33	溝畑	○		○					33	76	船窪	○		○	○	●	○	
13	35	宮垣外	○		○	○	●			34	77	城畑	○		○	○		○	
14	37	清水洞			○					35	80	鼠平Ⅱ	○		○	○			
15	38	宮の前	○		○					36	81	山本田代	○		○	○		○	
16	39	御園南部	○		○	○				37	82	城平上	○		○				
17	42	山寺			○					38	83	城平	○		○	○		○	古墳・中世城館址
18	44	今泉	○		○					39	84	常輪寺跡						○	
19	46	原垣外	○		○	○				40	85	北条	○		○	○			
20	47	鳥居原	○		○	○				41	87	常輪寺平	○		○	○		○	
21	50	伊那小学校			○					42	89	山の根	○		○	○		○	銅製鏡

No.	遺跡番号	遺跡名	平安時代 土師	平安時代 内黒	平安時代 須恵	平安時代 灰釉	平安時代 緑釉	中世	備考
43	90	小出城（城南）						○	中世城館跡
44	93	上島	○		○	○		○	中世城館跡
45	95	東方A				○		○	
46	96	村岡北						○	
47	97	村岡南						○	
48	98	大境	○		○	○		○	須恵器紡垂車
49	101	宮の原	○		○	○		○	
50	102	浜射場	○		○	○		○	
51	106	中村	○					○	中世城館跡
52	107	中村東	○						
53	108	カンバ垣外	○		○	○		○	中世城館跡
54	109	丸山						○	中世城館跡
55	110	薬師堂	○		○			○	中世城館跡
56	111	南小出南原	○		○	○		○	中世城館跡
57	112	唐木原	○			○			
58	113	山寺垣外						○	
59	114	白沢原	○		○	○		○	
60	115	名廻	○		○	○			
61	116	名廻南				○			
62	117	児塚	○						
63	123	眼子田原	○						
64	127	南丘B	○		○	○			石製模造品
65	128	南丘A	○		○	○			
66	131	上の塚						○	
67	135	下小出平	○						
68	137	東田	○		○	○		○	
69	138	南村	○		○	○			
70	139	井の久保	○		○	○		○	中世城館跡
71	140	表木原	○		○	○			中世城館跡
72	141	山の下	○		○				
73	142	高遠道	○		○	○			
74	143	西春近南小学校	○		○	○			
75	144	鳥井田	○		○	○			
76	145	蔦蒲沢	○		○	○		○	中世城館跡
77	147	富士山下	○		○				
78	148	広垣外Ⅰ	○		○				
79	149	広垣外Ⅱ	○		○	○			
80	150	宮入口			○	○		○	
81	151	和手	○	○				○	金製紡垂車
82	152	和手南			○				
83	153	城の腰	○		○	○			
84	154	安岡城	○		○	○		○	墓址・古銭・鉄子
85	155	横吹	○		○	○			
86	156	寺村	○		○	○			
87	157	下牧経塚						○	
88	160	山王				○		○	
89	164	ワランベ	○						
90	167	狐垣外	○						
91	169	辻垣外	○		○				
92	172	金山			○				
93	174	鳴神			○				
94	176	丸山						○	中世城館跡
95	182	中原	○						
96	186	小荻原			○				
97	188	近澗			○				
98	189	浜弓場	○		○	○		○	中世城館跡
99	193	砂場	○		○	○			
100	200	大原	○						
101	201	松太郎久保	○			○			
102	202	南垣外			○				
103	203	角城			○				
104	205	辻西幅			○				
105	208	山の田	○						
106	215	富士塚下	○		○	○			

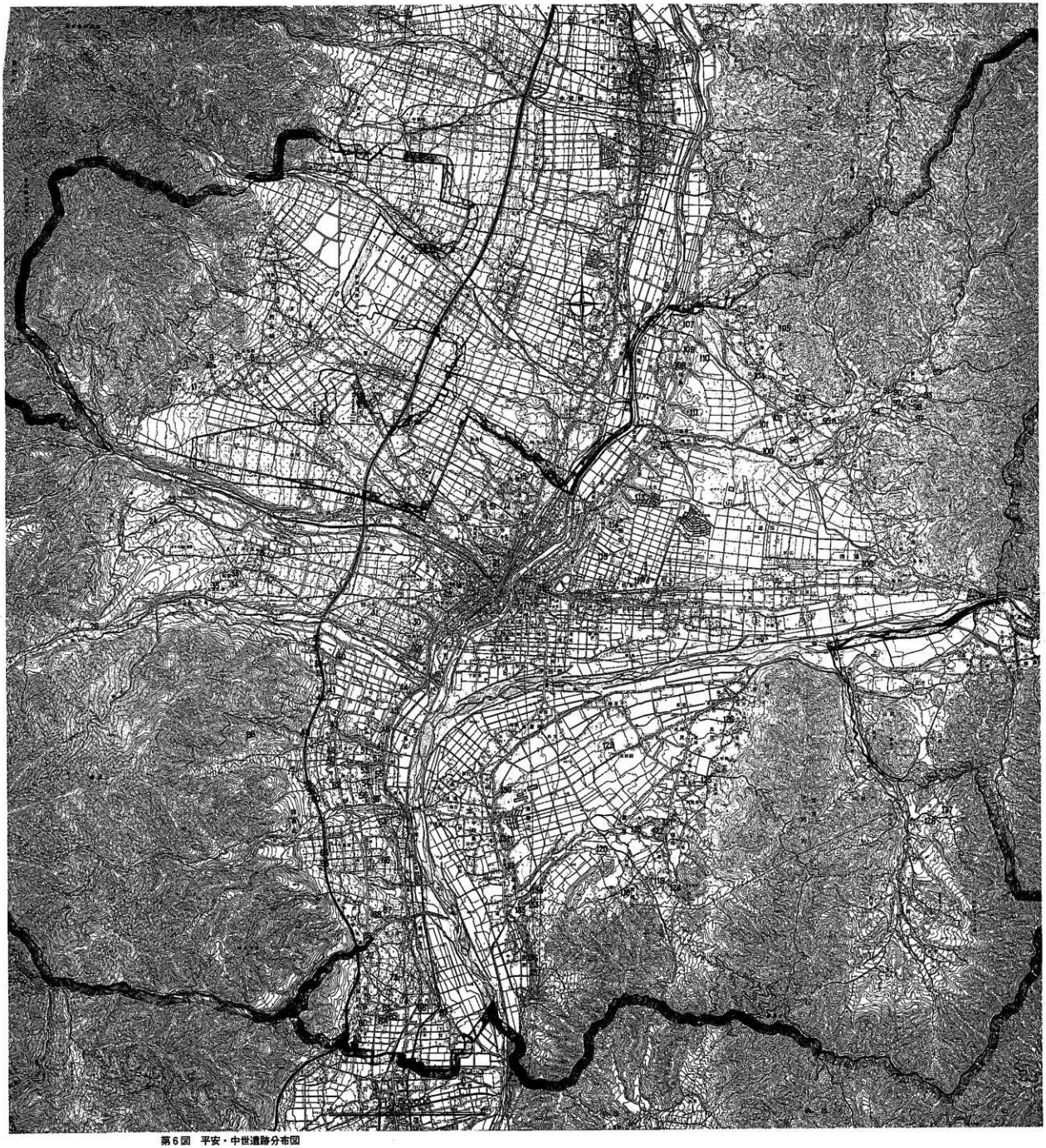
No.	遺跡番号	遺跡名	平安時代 土師	内黒	須恵	灰釉	緑釉	中世	備考
107	231	南原	○		○	○			
108	233	大上平	○		○	○			
109	234	池火平	○		○	○			
110	235	中原	○		○	○			
111	239	福島	○		○	○			
112	240	大久保				○			
113	243	長者屋敷	○		○	○			
114	244	芝垣外	○		○	○			
115	246	上垣外	○		○	○			
116	247	爪ケ崎	○						中世城館跡
117	249	上の原			○				
118	252	八人塚						○	
119	253	小御堂	○		○	○			
120	254	高岱	○						
121	258	羽根原	○		○	○			
122	259	羽根田	○		○				鉄釘
123	260	三つ木	○		○	○			
124	265	根木谷中畑	○		○	○			
125	270	御殿場	○		○	○		○	鉄滓・鉄鏃
126	272	宮の花	○				●		
127	278	舟ケ洞	○						
128	279	芝王	○		○	○			
129	288	上原	○		○				
130	291	老松場			○				
131	297	本城			○				
132	301	古寺	○					○	
133	308	駒形			○			○	
134	309	一本松	○						
135	312	宮ノ上	○		○	○	●	○	
136	321	男塚	○		○	○	●	○	
137	323	上の段	○		○	○		○	

第2表　地区別遺物別出土遺跡数集計表

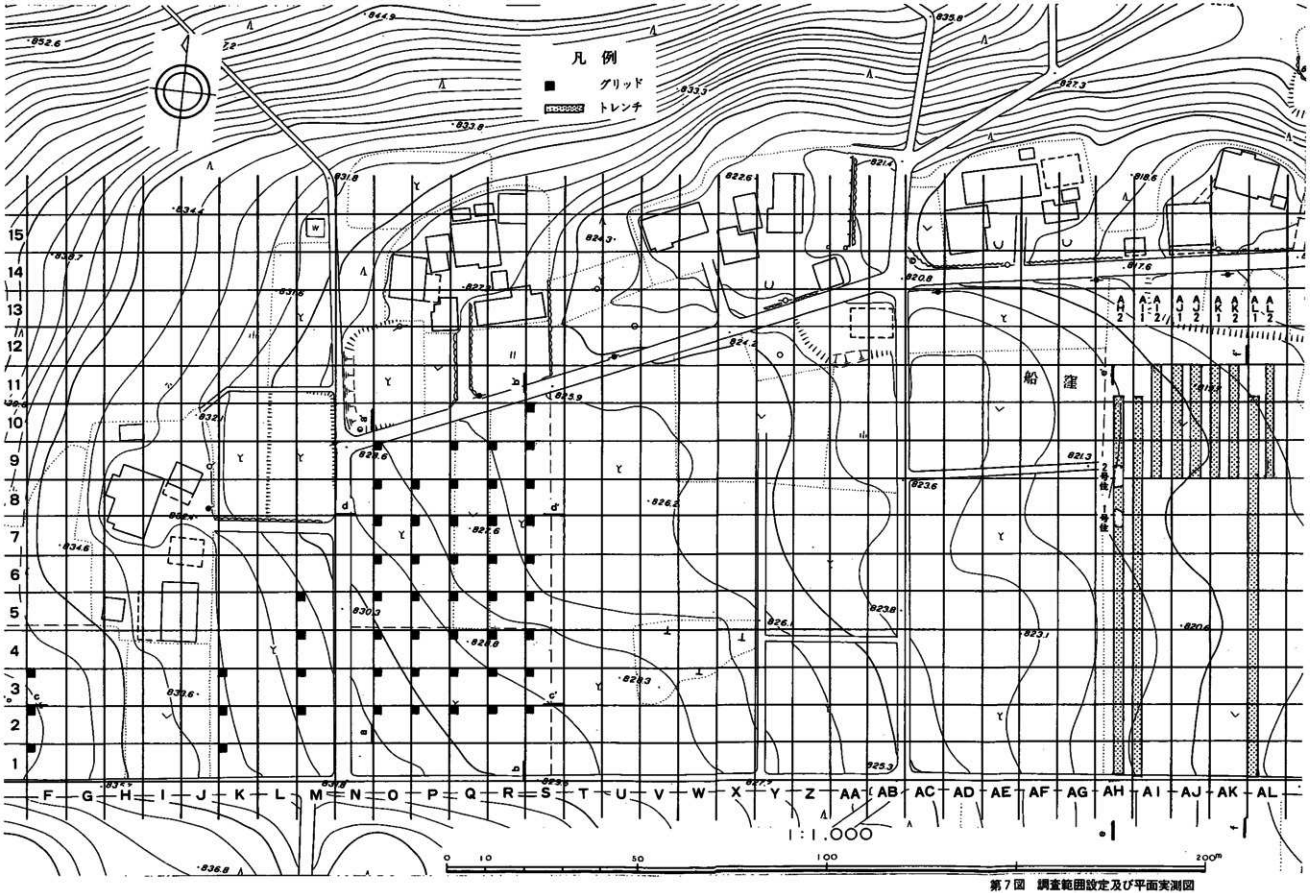
地区		伊那	富県	美篶	手良	東春近	西箕輪	西春近	合計
平安時代	土師	25	10	1	9	6	10	40	101
	内黒								
	須恵	27	7	1	10	7	10	36	98
	灰釉	24	6	1	3	3	6	33	76
	緑釉	1				2	2		5
中世		9	2		2	5	3	29	50

第3表　地区別平安・中世の村数集計表

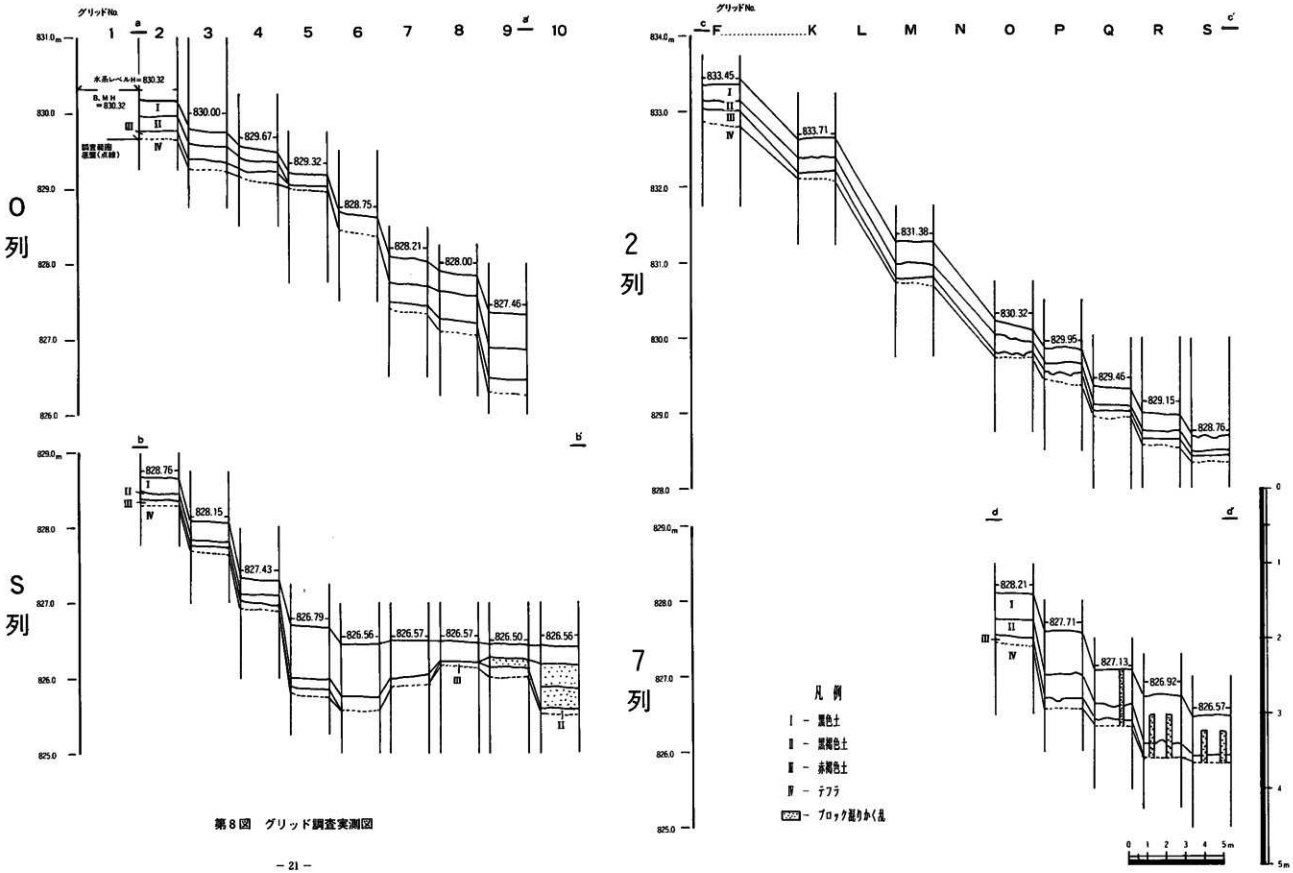
地区	伊那	富県	美篶	手良	東春近	西箕輪	西春近	合計
平安	20	8		15	9	11	44	107
中世	9	2		2	5	3	29	50



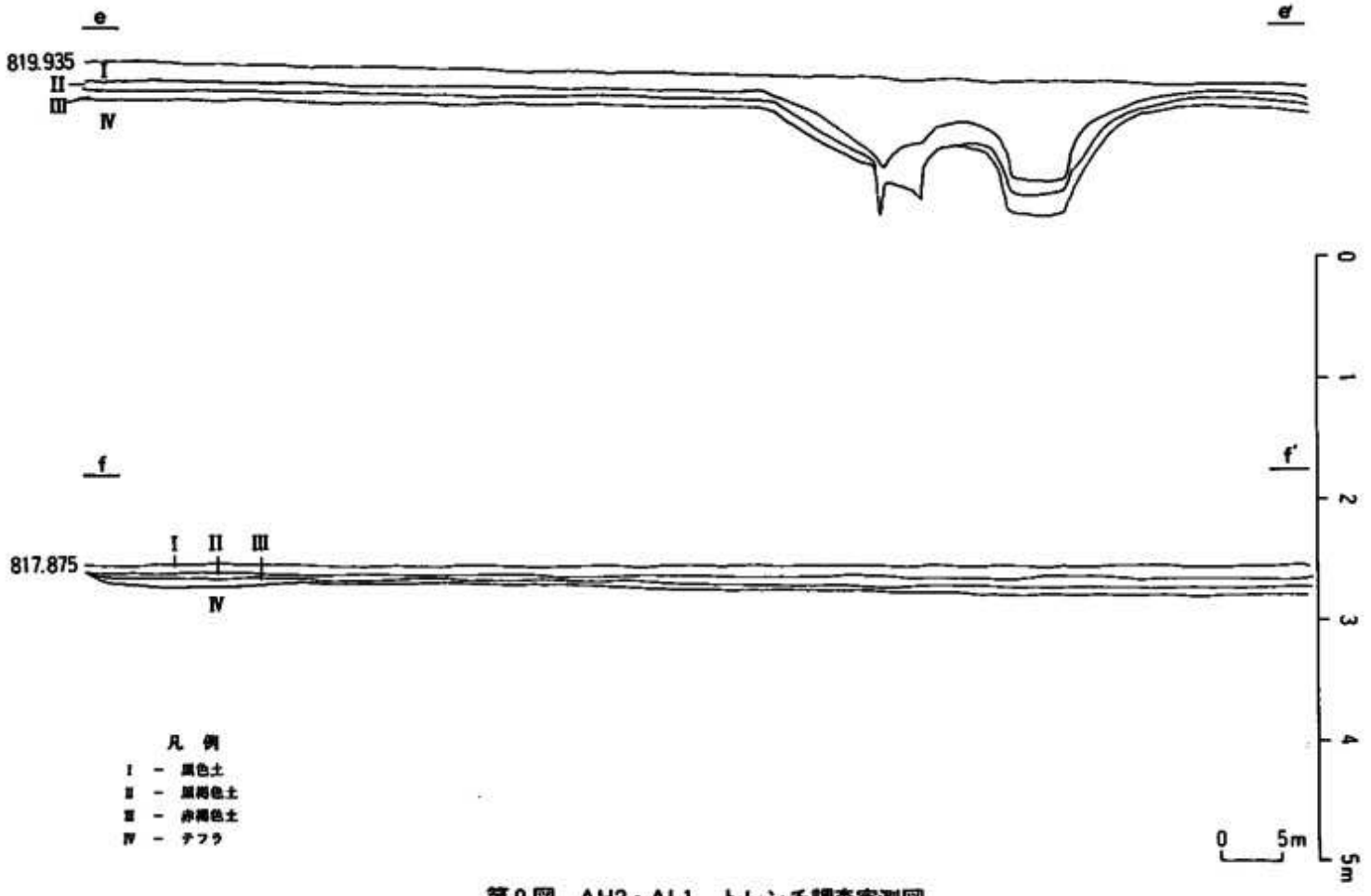
第6図　平安・中世遺跡分布図



第7図　調査範囲設定及び平面実測図



第8図　グリッド調査実測図



第9図　AH2・AL1　トレンチ調査実測図

第4表　グリッド一覧表　　(単位　m)

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
F	規模	2×2	→	→							
	深さ	0.45	0.30	0.28							
	標高	833.35	833.35	832.92							
K	規模	2×2	→	→							
	深さ	0.44	0.50	0.64							
	標高	832.99	832.63	831.90							
M	規模		2×2	→	→	→					
	深さ		0.60	0.46	0.60	0.40					
	標高		831.28	831.00	830.80	830.69					
O	規模		2×2	→	→	→	→	→	→	→	
	深さ		0.50	0.52	0.40	0.22	0.25	0.70	0.80	1.05	
	標高		830.22	829.86	829.57	829.22	828.71	828.11	827.90	827.30	
P	規模		2×2	→	→	→	→	→	→		
	深さ		0.50	0.44	0.34	0.26	0.40	1.04	1.10		
	標高		829.83	829.30	828.92	828.57	827.95	827.61	827.41		
Q	規模		2×2	→	→	→	→	→	→	→	
	深さ		0.40	0.26	0.30	0.26	0.54	0.74	0.56	0.70	
	標高		829.36	828.91	828.39	827.77	827.31	827.09	826.89	826.85	
R	規模		2×2	→	→	→	→	→	→	→	
	深さ		0.46	0.40	0.30	0.72	1.06	0.82	0.58	0.50	
	標高		829.01	828.53	827.78	827.21	826.86	826.80	826.61	826.43	
S	規模		2×2	→	→	→	→	→	→	→	→
	深さ		0.38	0.40	0.40	0.92	0.90	0.60	0.32	0.45	0.90
	標高		828.68	828.11	827.33	826.69	826.46	826.51	826.51	826.46	826.44

第5表　グリッド遺物一覧表

グリッド番号	M－2	R－7	S－6
遺物の種別等	縄文中期後葉1点	縄文中期後葉1点	縄文中期後葉1点

第Ⅲ章　調　査

第１節　調査の概要

今回の調査では今までに調査されたことのない船窪遺跡の西側、伊那市大字伊那6945番地２、6960番地４・７の分布調査を行った。

試掘を伴う詳細分布調査ということで、調査範囲の内の西側は２×２ｍのグリッド、東側は２ｍ幅のとレンチを設定し実施した。（第７～９図、第４表）

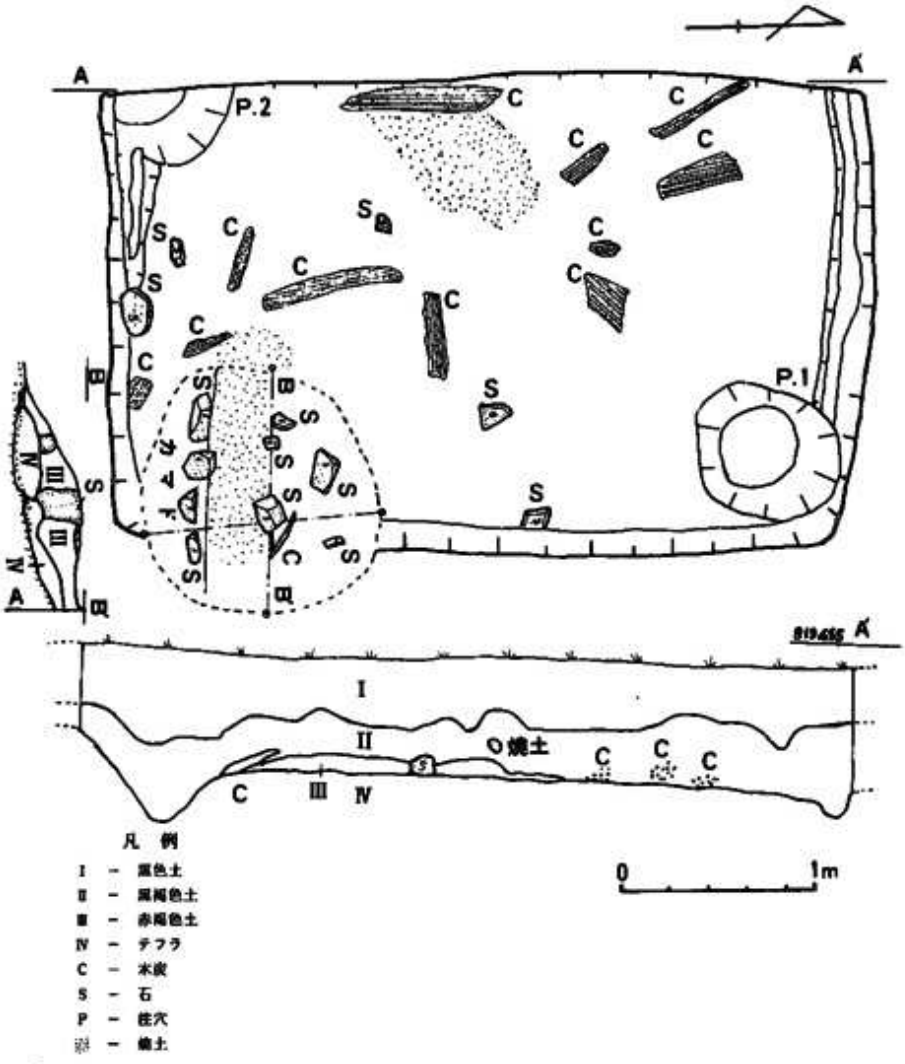
まず、表面採集による調査を行い、縄文・平安等の遺物が数多く認められた。その後西側において５０箇所のグリッド調査を行ったが遺物は３点（第５表）しか認められなかった。東側に移り９本のとレンチ調査を行い、ＡＨ－２トレンチからは２つの平安の住居址が検出され、遺物も多数出土したが、その他のトレンチからは遺構・遺物などまったく認められなかった。

第２節　遺構と遺物

第１号住居址

遺構（第10図・図版６）

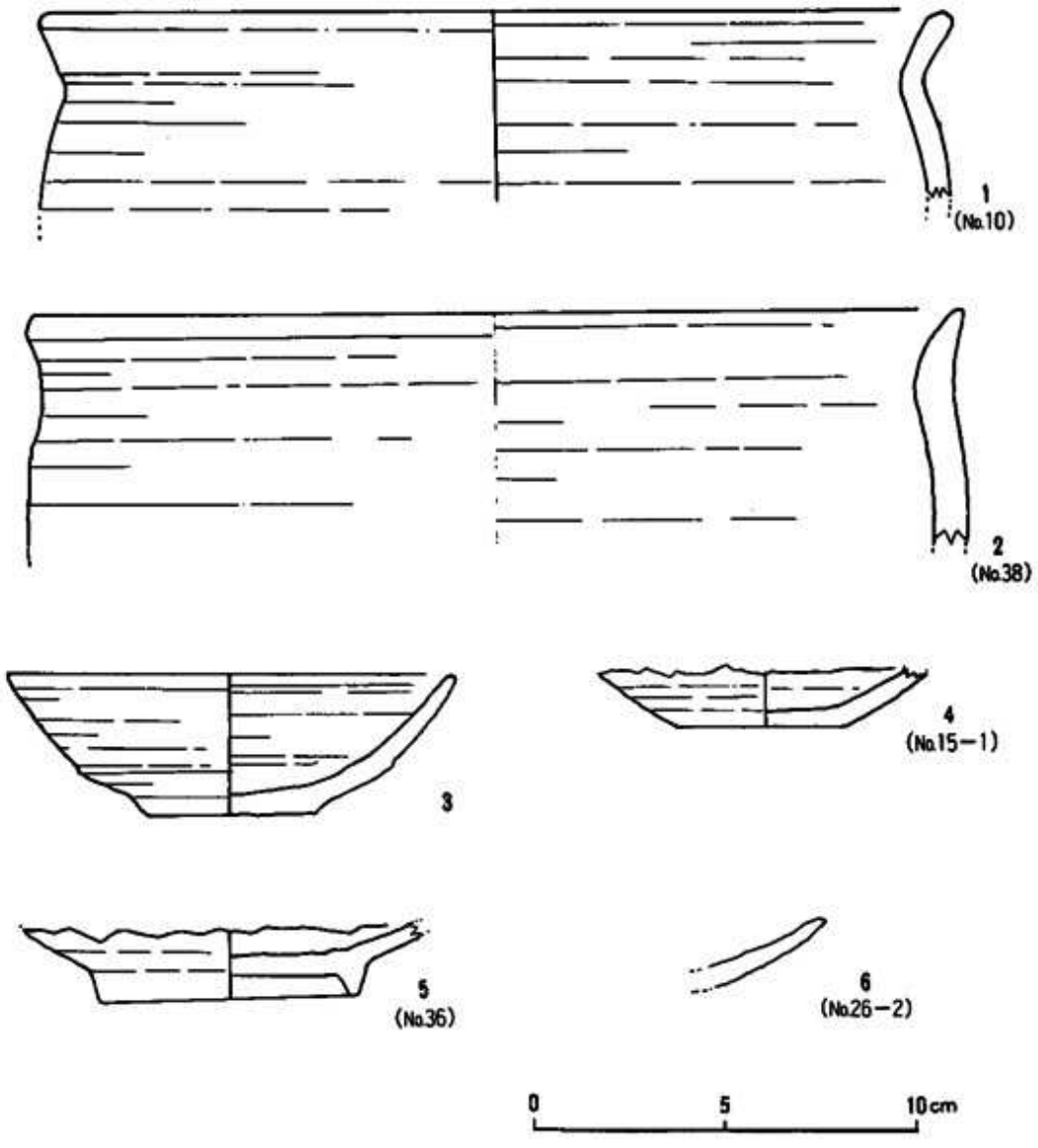
本住居址はＡＨ２トレンチ南側道路より65ｍの地点に発見された遺構である。本址の西側は調査の区域外になっているため住居址を拡張して調査はできなかった。本址の規模は南北3.95ｍ、東西は2.45ｍの範囲だけしか調査できなかった。調査した遺構の床面は地表面から60㎝下に検出された。住居址の壁は内側に向かって45°内外の傾斜をなしていたが、壁面には特別な施設は発見できなかった。床面はほぼ平らに作られており、床の一部には軟弱な箇所が見受けられたが、大方は固く叩かれていた。周溝は南北の壁に沿って検出され、その規模巾８～12㎝深さ５～８㎝内外の凸凹の多い周溝であった。柱穴は２箇所検出された。１の柱穴は東北の壁に接して検出された。その規模は床面で67㎝、底面で39㎝、深さは46㎝の柱穴であった。２の柱穴は用地外に接していたため全体を知ることができなかったが、上面で65㎝、底面で30㎝、深さ21㎝で楕円形の柱穴であることを確認した。本址のカマドは住居址の東南の壁に接して発見された。このカマドは石芯の粘土カマで、その規模は東西1.25ｍ、南北1.20ｍを測る。煙道の巾は25～28㎝内外で両側に片麻岩の自然石15～35内外の石を芯にして粘土で造られたカマドであった。カマドの上部は耕作でかなり壊されていた。カマド内からは土師のカメ形土器や灰釉陶器が検出された。また、床面には焼土や木炭片が多く発見されたことは、本址が火災にあったことを物語っているものである。



第10図　第１号住居址実測図

遺物（第11図・図版８）

１は甕形土器の口縁部で、口径24cmの土師器、器面には整形時の指痕が残る程の粗製の土器で、表面には横位にロクロ痕が見られる。胎土には長石粒が多く含まれている土器である。２は１と同じ甕形土器の口縁部で、口縁の立上がりが急な土器である。器面にはかなりの指痕が目立つ粗製の土師器である。３は土師の口径11.8cmの碗形土器である。底部には糸切痕が残り、胎土には多くの長石粒が含まれている粗製で、ロクロ目が目立つ土器である。４は土師器の皿の破片で、底部に糸切痕が認められる内黒の土器である。５は灰釉陶器の底部で、高台は付高台であって、底部には糸切痕が見られる。また、外面側無釉であるが、内側は全体に灰釉が施され、胎土は灰白色の東濃産と考えられ折戸53期の陶器と思われる。６は灰釉の皿形の口縁部で、施釉は外面の縁のみに見られるが、内面の底部は無釉である。胎土は灰白色の東濃の窯産と考えられ、時期は折戸53の時期と考えられる。



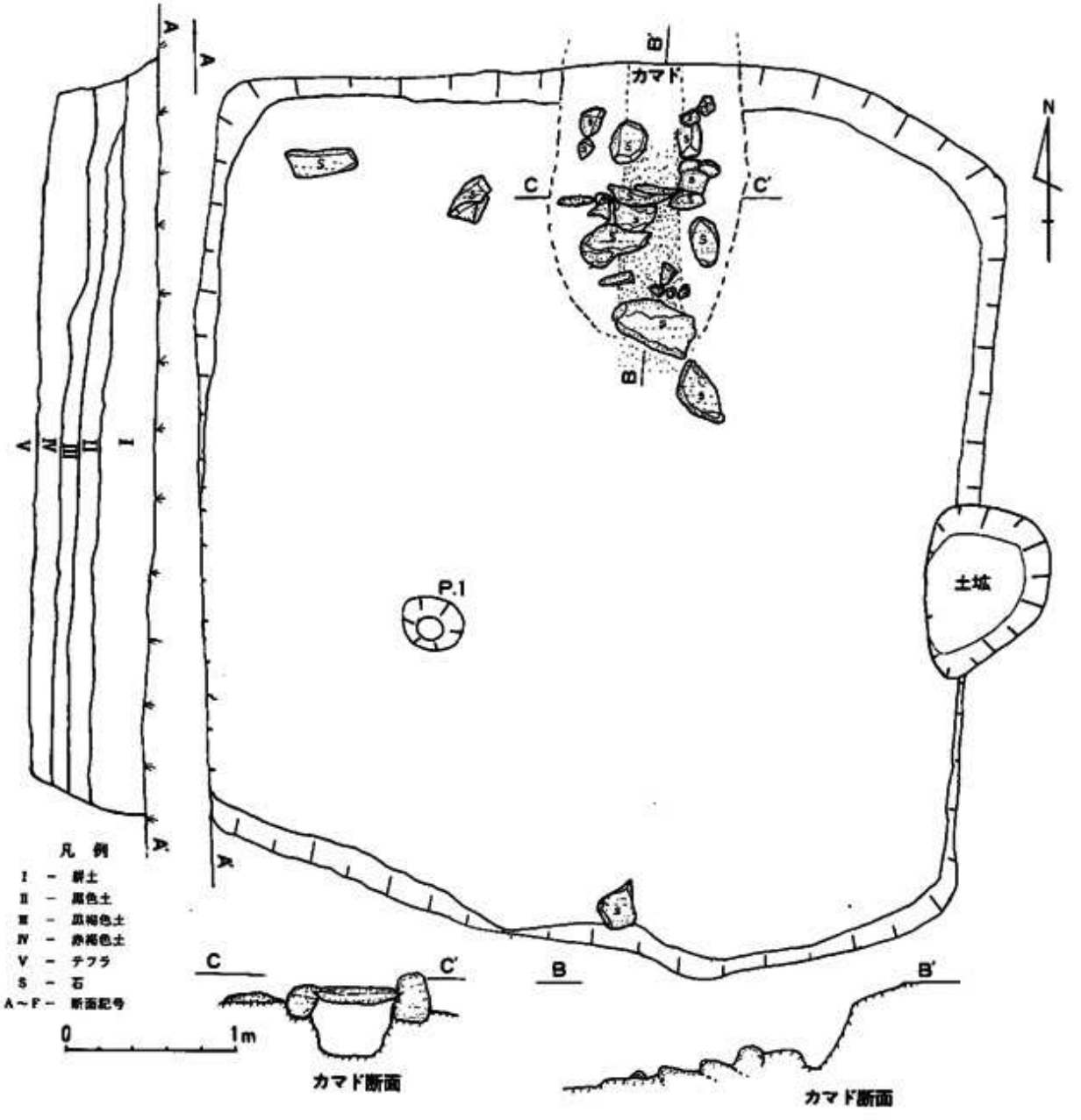
第11図　第１号住居址出土遺物実測図（１：２）

第２号住居址

遺構（第12図・図版６）

本址はＡＨ２トレンチの76～82mの間、第１号住居址の北側に発見された住居址である。この住居址は調査用地内に検出されたので、一部拡張して調査することができた。住居址の規模は東西4.70m、南北5.12mの隅丸方形の竪穴式住居址である。この住居址の確認された面は、地表下50cm黒褐色面に住居址の切込を認めることができた。住居址の床面は一部やや軟弱な箇所もあったが、大方は堅く踏固められていた。床面には柱穴は１箇所だけ検出できたが、他に柱穴址らしきものは発見することができなかった。本址のカマドは北東の壁に接して発見され

た。カマドは石芯の粘土ガマで、その規模は東西1.40m、南北1.80mのかなり大形のカマドである。カマド内からは第13図８の「つば」付の「カマ」が発見された。

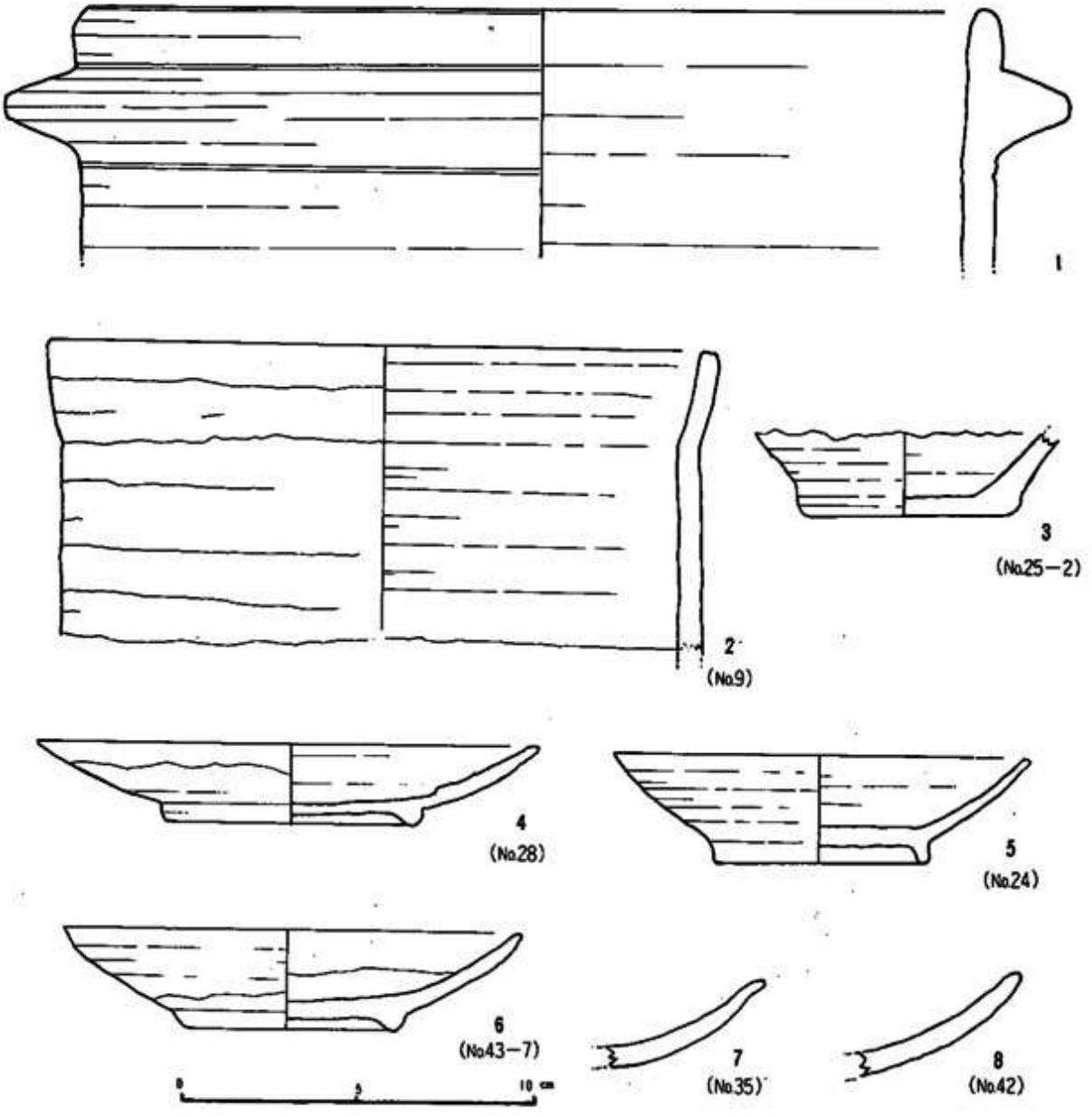


第12図　第２号住居址実測図

遺物（第13図・図版９・10・口絵）

１はつば付釜の口縁部破片である。この種のつば付釜の類はあまり見かけない遺物であるため、ここでは型式的な面は後日資料の整理をまって述べたいと思う。つば付釜の規模は口径で25.8cmを測る。つばの張出は２cmと、それ程大形のつばではない。胎土には長石粒と金雲母が多量に含まれた土器である。２は口縁の立ち上りの急な口径19cmの小形の胴長の深鉢形の土器

で、胎土には金雲母と長石粒の含まれた、やや粗製の土器である。3は付高台の大きく破損した糸切痕の認められる碗形の土師器である。4は緑釉陶器と共に検出された口径14.5cmの灰釉の皿である。施釉は外側面つけがけで、内面は底部のみ無釉である。産地は胎土の灰白色であることから東濃の窯で焼かれたと思われる。時期は折戸53と考えられる。5は緑釉陶器。口径12cm、底径6.20cm、高さ3cm、器厚は平均4.20mm、重焼の痕を残した青緑色の皿形陶器である。窯は東濃と考えられる。時期は折戸53期と思われる。6は口径13cmの付高台の皿形の灰釉陶器である。7は碗形の灰釉陶器で、東濃産と考えられる。時期は折戸53期と思われる。8は碗形の付けがけの灰釉陶器で、時期は折戸53期と考えられる。



第13図　第2号住居址出土遺物実測図（1：2）

グリッド出土遺物（第14図・図版10）

1はR－7グリッド出土遺物。判載竹管工具で平行沈線文が施された縄文中期後葉Ⅱ期と考えられる土器。2は無文の縄文中期後葉Ⅱ期頃と考えられる土器。

表面採集遺物

A）土器（第15図・図版10）

1は判載竹管工具による連続爪形文が施された深鉢形の口縁部。縄文中期中葉Ⅲ期に比定されると考えられる土器。2は深鉢形土器の頸部の隆帯に判載竹管の工具による連続爪形文が施された縄文中期後葉Ⅰ期と思われる土器。3は押引による平行爪形沈線文の縄文中期後葉Ⅰ期と考えられる土器。4は口縁部の隆帯に爪形文と斜状文の縄文後期Ⅱ期考えられる深鉢形土器。5は口縁部に粘土紐の貼付篦目文深鉢形の縄文中期後葉Ⅰ期の土器。6は横位の沈線文の間に粘土紐による蛇行文が施された縄文中期後葉Ⅱ期と思われる土器。7・8は判載竹管工具による平行沈線文が施された縄文中期後葉Ⅱ期と思われる土器。9は斜縄文の深鉢形の縄文中期後葉Ⅱ期と考えられる土器。10は篦状工具で縦状に沈線文が施された縄文中期後葉Ⅲ～Ⅳ期の土器。11は糸切底のⅢ形の平安時代土師器。

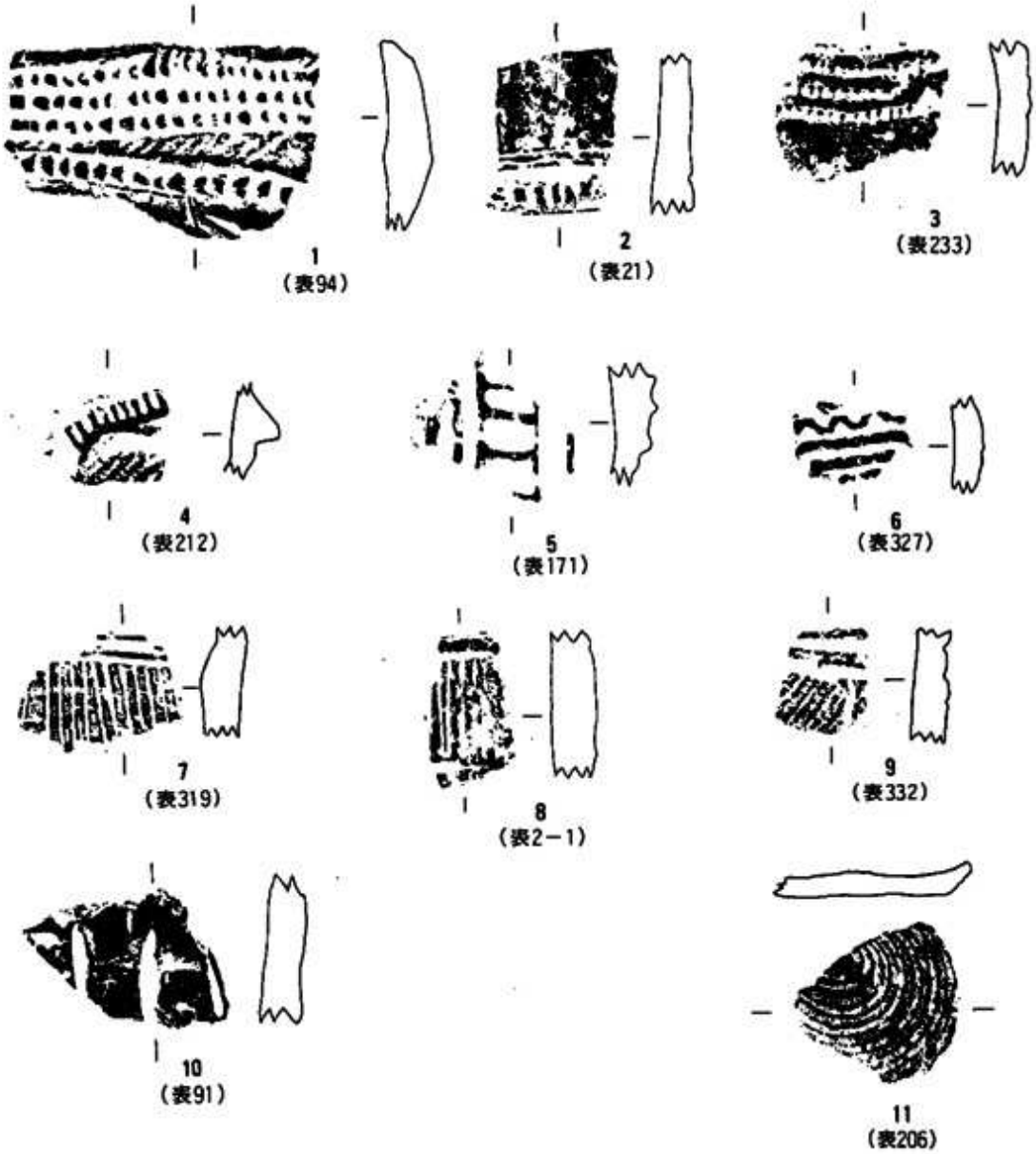
B）石器（第16図・図版11）

1は撥形の打製石斧、硬砂岩。2は短冊形に近い打製石斧、緑色岩。3は撥形の自然面を残した打製石斧で、岩質は緑色岩。4は先端部が尖った撥形の緑色岩の打製石斧。5は撥形の硬砂岩の打製石斧。6は撥形の自然面を残した粘板岩の打製石斧。7は撥形の緑色岩の打製石斧。8は一部に磨製部を残した緑色岩の打製石斧。9は硬砂岩の横形の打製石匙。10は横形の打製石匙。11は大形の硬砂岩の石錘。12は中形の緑色岩の石匙。13は硬砂岩の剥片石核。14は硬砂岩製の掻器。15は小形硬砂岩の石錘。

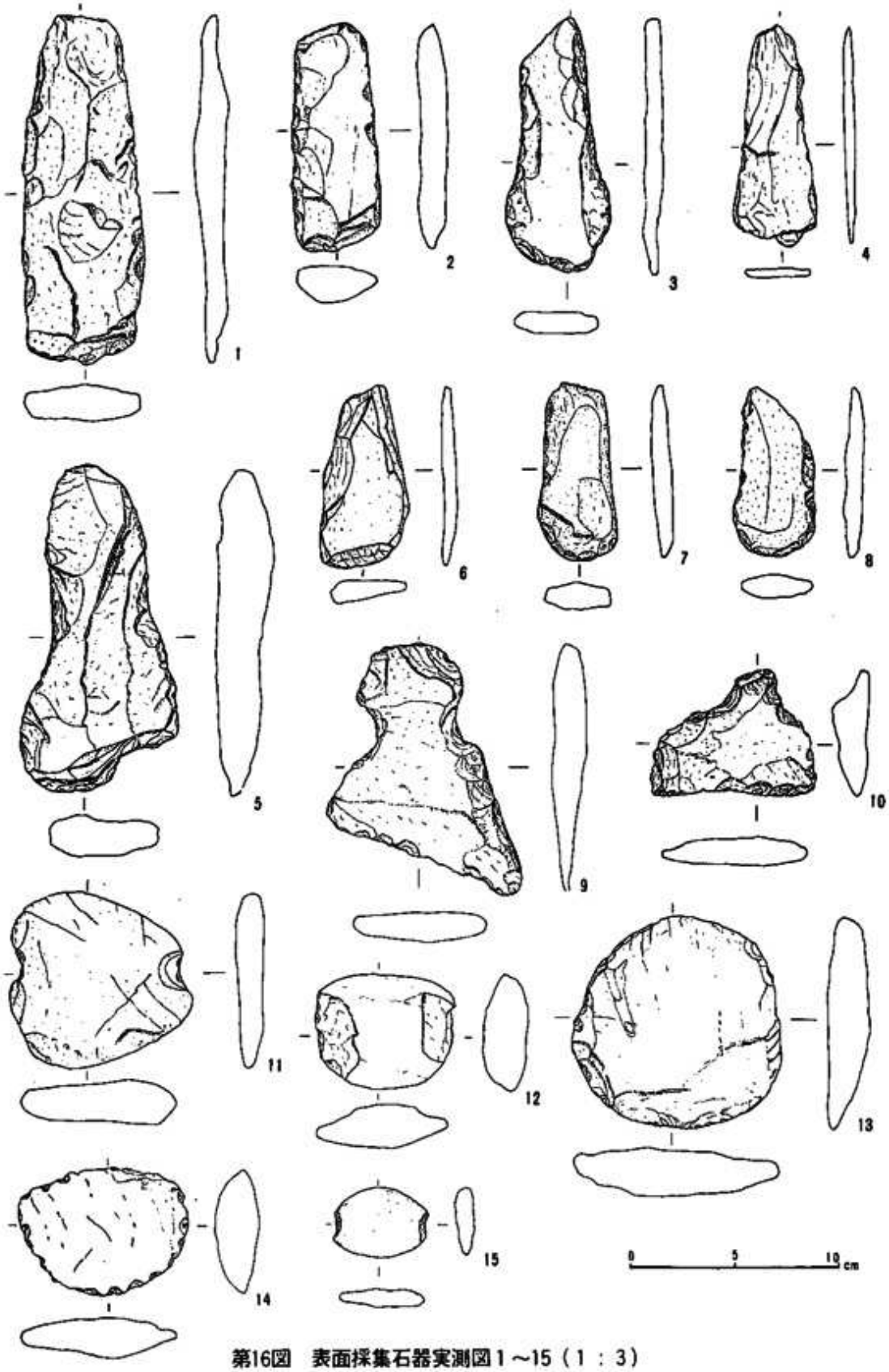
C）石鏃（第17図・図版12）

1～6は無柄の石鏃で、底辺にえぐりのやや認められる、径2.5～5cmの黒曜石製の石鏃である。7は長径5.5cmのややえぐりの深い黒曜石の石鏃。8は無柄のえぐりの深い黒曜石の石鏃。9・10は有柄の黒曜石の石鏃。11・12は小形黒曜石の尖頭器形石器。13は基部が二等辺三角形で、両側に綾があり、1孔が設けられた粘板岩製の磨製石鏃である。使用時期は弥生時代と考えられる。

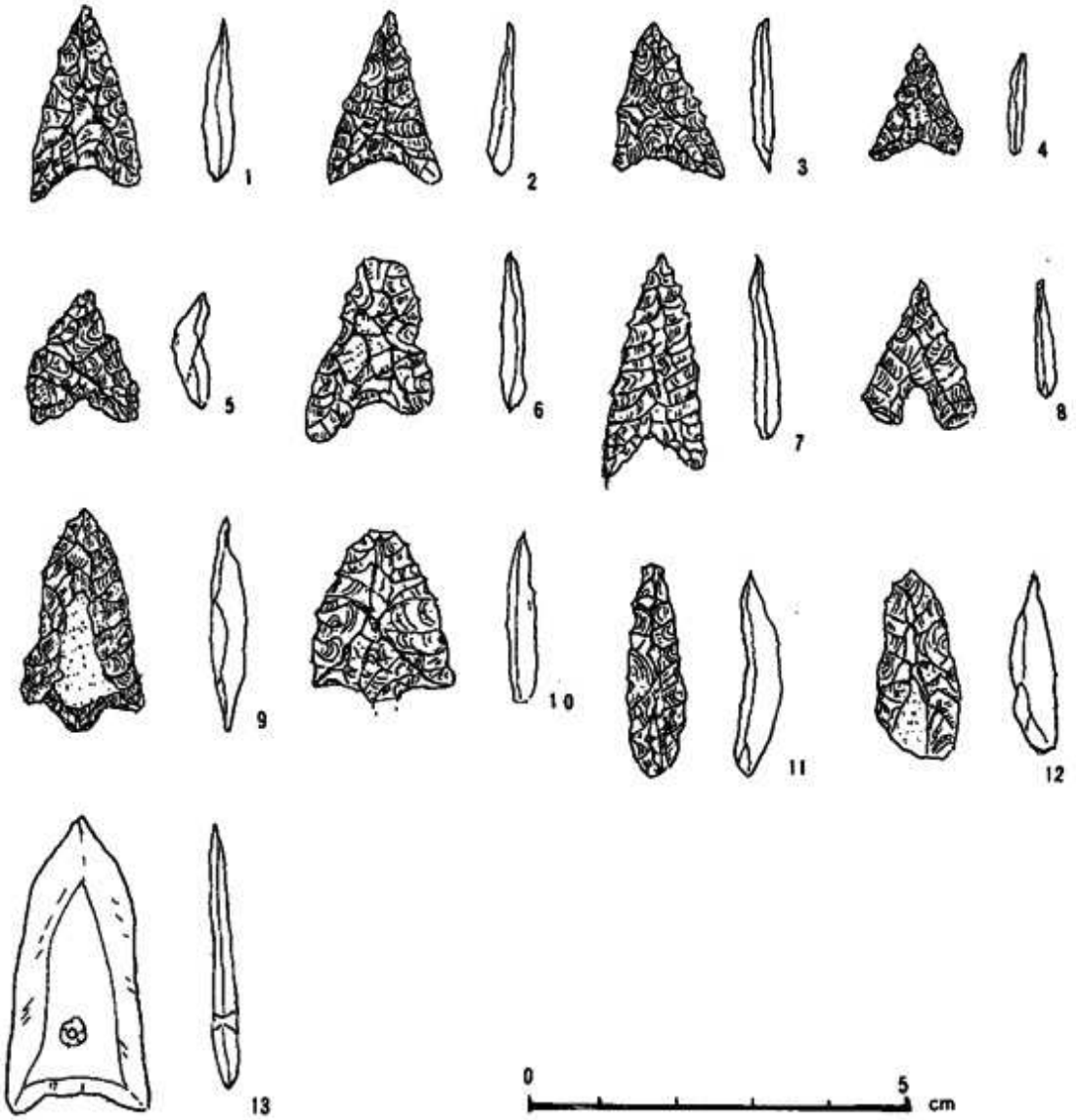
第14図　グリッド出土遺物拓影1・2（1：2）



第15図　表面採集遺物拓影１～11（１：２）



第16図　表面採集石器実測図1～15（1：3）



第17図　表面採集石鏃実測図1～13（1：1）

ま　と　め

今回実施されたますみヶ丘（舟窪西遺跡）の分布調査において知り得た二・三の問題点になると考えられる事項について述べ、まとめとしたい。

船窪地域の地形・地質については松島信幸氏が詳細に記述されているので、ここではその内で主要と考えられ点を略記してみると、ここ船窪地域は小黒川の扇状地の開折段丘であり、何段かの侵食面にわかれている地形であること、また、ここ船窪地域の中央部を横切って北西向から南東に通過する船窪断層が存在していること、この船窪断層は当地域の侵食面形成後に山地～盆地間の境界域に集中した短縮変形を受け、山地側が盆地側へ衝上したために生じた断層である。

その他、この地域が伊那谷中でも景観上や学術面からも、また、ますみヶ丘一帯は保水上の保全地域としても、注目しなければならない重要な地域である。

船窪地域の地質は、領家帯青石帯のホルンフェルスを基盤岩としその上に小黒川扇状地礫層と、テフラ層は御岳軽石層より上部の褐色土中に、広域テフラの姶良（ＡＴ）が認められる地質である。

船窪地域が近年に至って農耕による開発が行われた結果、所々から縄文時代の遺物が発見されてこの地域が縄文時代の遺跡であることが確認されたのである。最近この付近で農耕以外の開発が計画されているとのことから、隣接している船窪地域の分布調査を実施したのである。調査はかなり広範囲に渡ったので、場所によってグリッドによる所とトレンチ調査による所となった。

最初に調査した西地区はグリッドによる調査となり、100㎡当り２×２ｍのグリッドを設け調査を行った。その結果７－Ｒグリッドと Ｓ－６グリッドより縄文中期後葉Ⅱ期の土器が検出されたが、住居址はついに発見することはできなかった。東地区ではトレンチを設置して調査を行った。その結果、ＡＨ－２トレンチの北側に１・２号の平安時代後期の住居址を発見することができた。これら竪穴住居址には石芯粘土ガマが設けられていた。出土した遺物は土師器・須恵器灰釉陶器などが出土した。そのうち、２号住居址からは灰釉陶器と緑釉の皿形陶器が共出したことで注目されることとなった。伊那市で緑釉陶器が発見された遺跡は、西箕輪の仲仙寺前の金鋳場・宮垣外遺跡、富県では宮の花遺跡、東春近では宮の上・男塚遺跡、そして今回発見のますみヶ丘の舟窪西遺跡の６箇所となった。これだけの当時としては高級品の陶器を使用することのできた文化的な村々が存在していたことに注目したい。

この船窪遺跡の調査が動機となって、伊那市中の平安の村の分布図を作成することができた。その他に縄文時代中期後葉の遺跡に必ずというくらい平安時代の村が共存していることにも注目しなければならないことを知り得た。

今回の調査でのいろいろと協力していただいた小田切課長・林係長・早川主事に感謝申し上げる次第である。また、地元の星野文四郎・星野眞吾さんには表採資料をの提供していただき大変参考になりましたことを合わせてお礼申し上げます。最後になりましたが松島信幸先生には、地形・地質での優れた解説をいただきましたことを心より厚くお礼申し上げます。

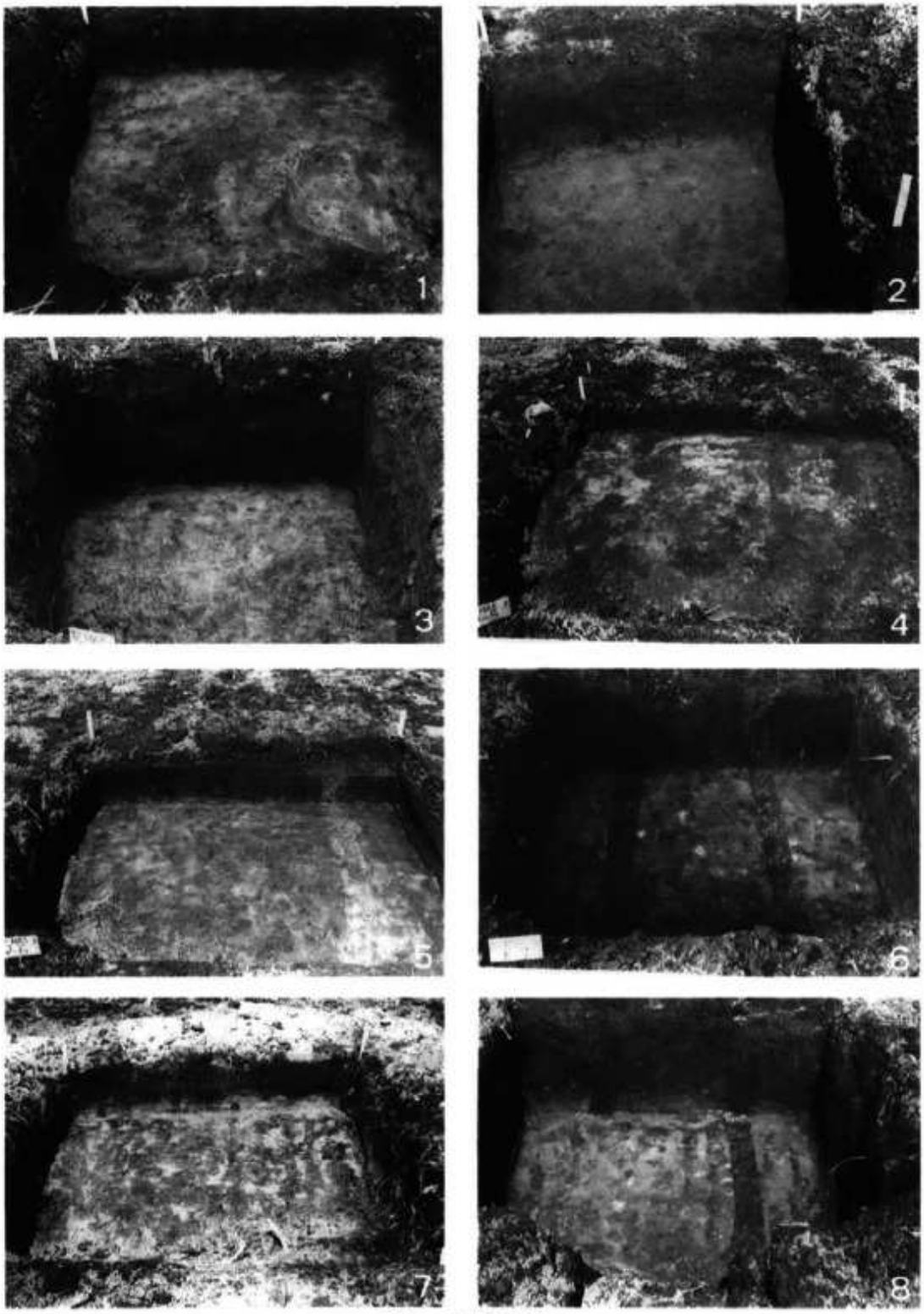
（友　野　良　一）

写真図版

図版1

調査か所全景

図版2



グリッド調査状況

1、O－4　2、O－8　3、P－7　4、Q－5
5、Q－6　6、R－7　7、S－3　8、S－6

図版3

AH−2トレンチ

AI−1トレンチ

AI−2トレンチ

AJ−1トレンチ

AJ−2トレンチ

AK−1トレンチ

図版5

AK−2トレンチ

AL−1トレンチ

AL−2トレンチ

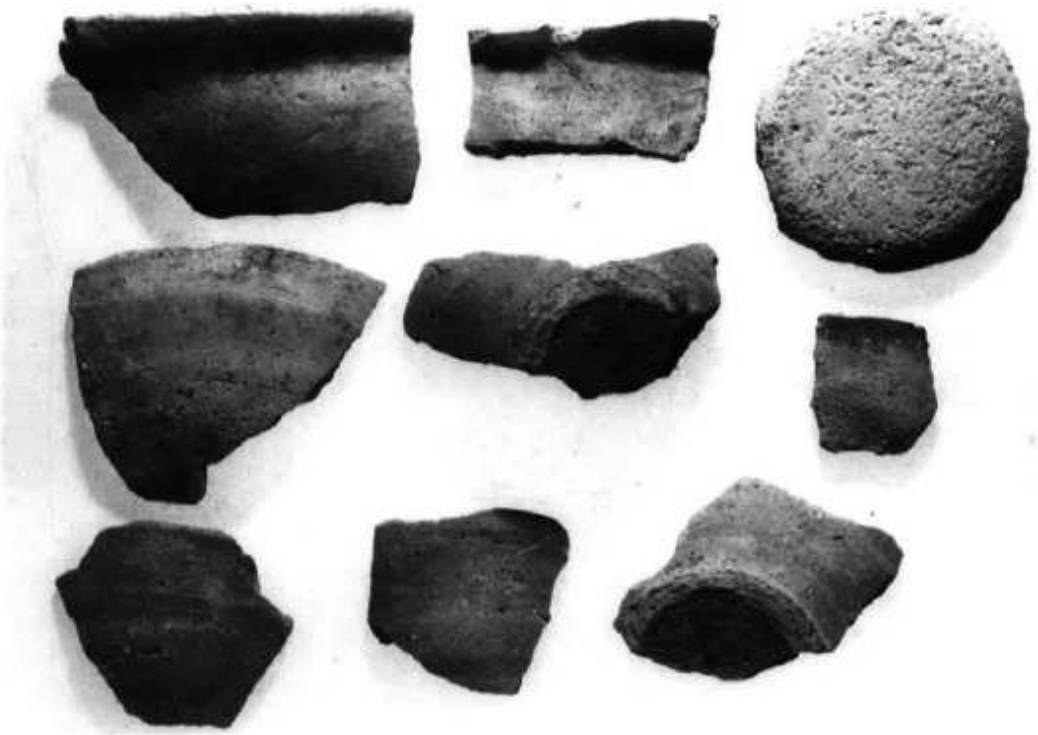
第1号住居址

第2号住居址

図版7

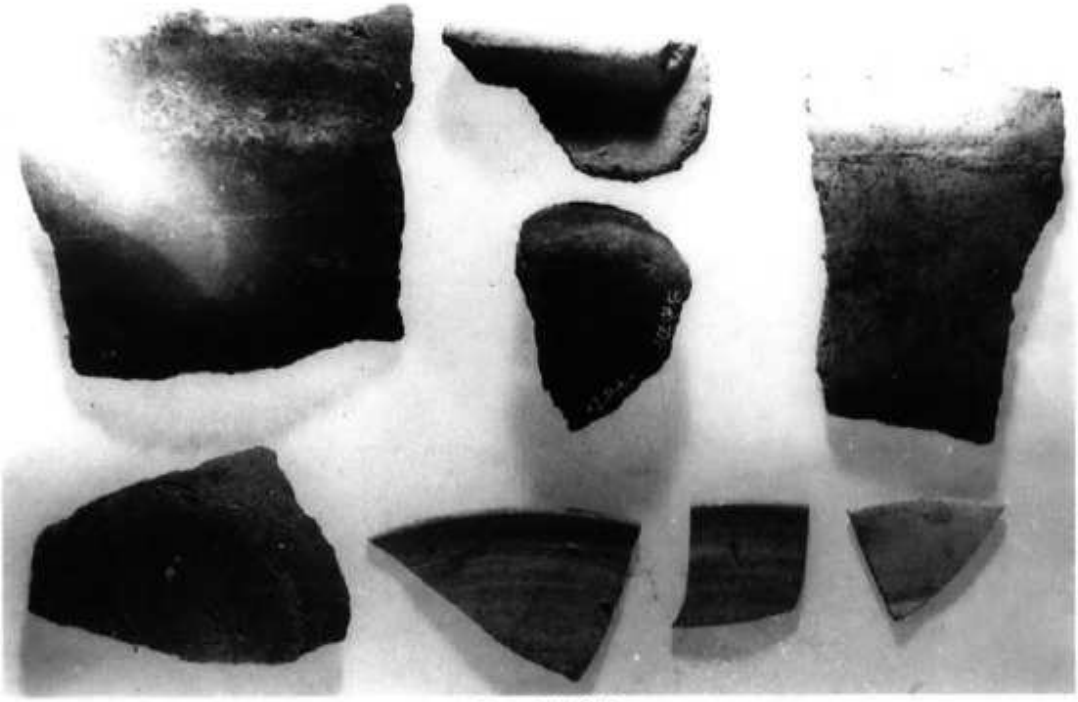
1号住カマド及び遺物出土状況

2号住カマド及び遺物出土状況

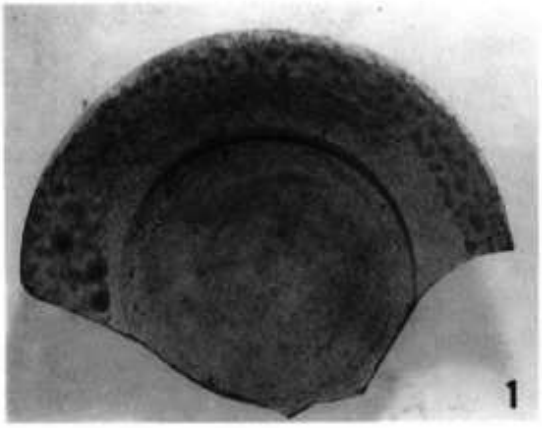


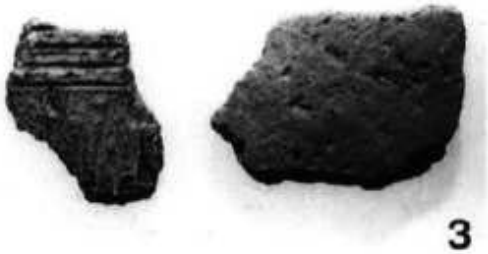
1号住出土遺物

図版9



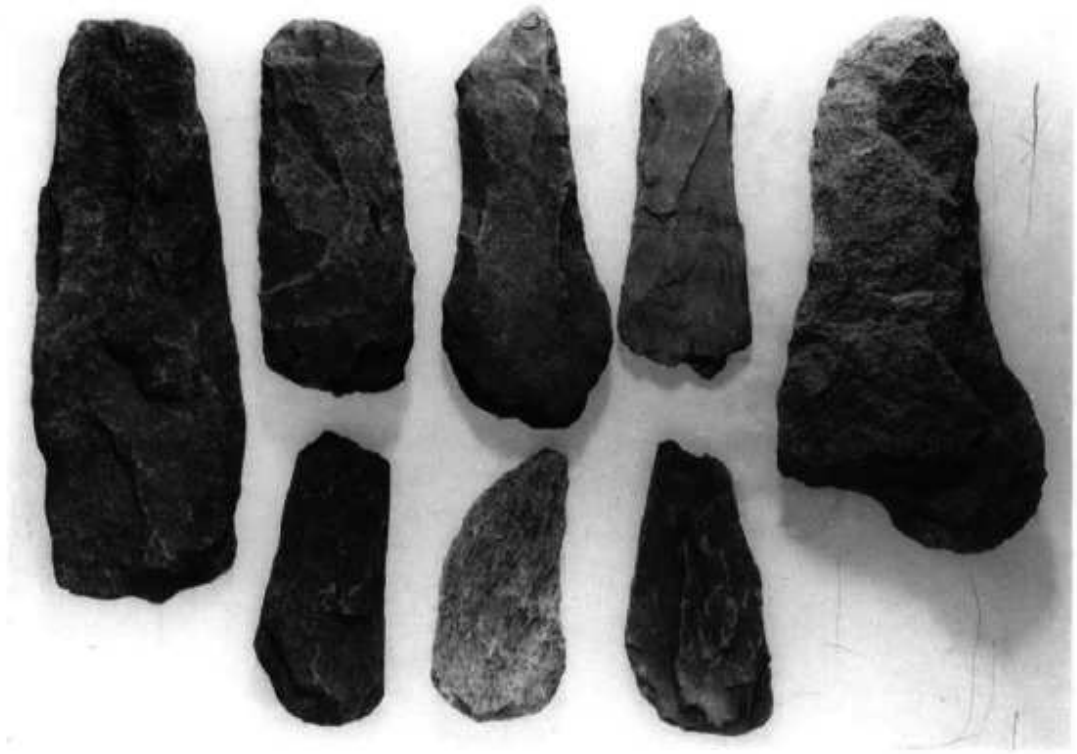
2号住出土遺物

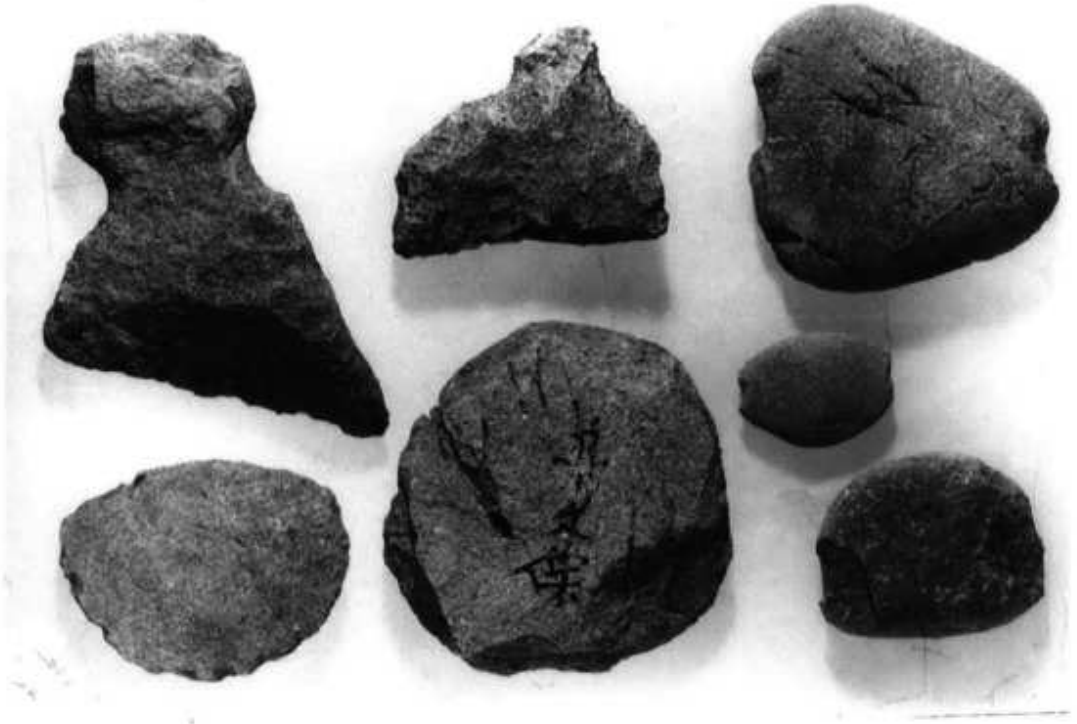




1・2、2号住出土灰釉皿　3、グリッド出土遺物　4・5、表面採集遺物（土器）

図版11





表面採集遺物（石器）

図版12

表面採集遺物（石鏃）

発掘調査団と教育委員会事務局

福島地籍

第Ⅳ章　分布調査地籍の環境

第１節　分布調査の位置

第18図　分布調査の位置

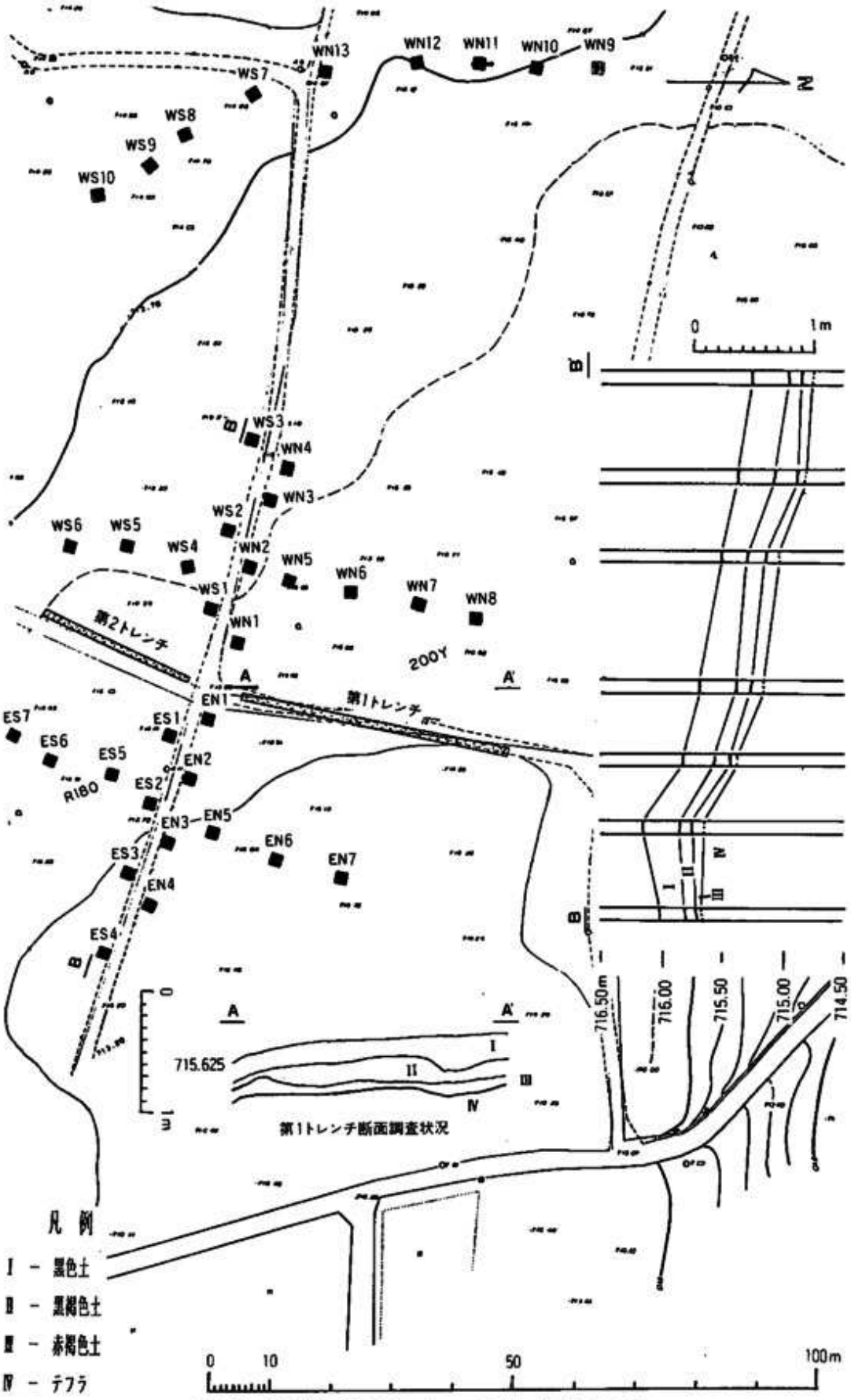
今回調査したのは、長野県伊那市大字福島地籍で、その内でも野底地籍と接する--番南端の天竜川左岸・棚沢川右岸の台地段丘上の山林地帯である。

この地籍に至るには、ＪＲ飯田線伊那市駅から国道153に出、国道153を２km程北へ向かう。御園双葉町の信号機を右折し新水神橋を渡り、竜東線に突き当たったら左折し２km余り北に向かう。福島志茂の信号機を右折し、500m程坂道を上る。そこから西側の山林地帯が今回の調査の地籍となる。

第２節　地理・歴史的環境

今回分布調査の行われた箇所は現在山林地帯となっているが、この地域の東側には畑地と水田が分布している。この畑地からは表採で土師器の小破片が検出されている、また隣接して著名な福島遺跡があるところより、直接遺構に結びつく遺跡にならなくとも、何らかの関係があるのではないかと考えられないこともない地域である。この地域の南の天竜川にそそぐ棚沢川の合流天上には古墳時代末期の１～５号までの古墳が現存している。そのうち５号墳は福島部落に近い下段の小高い丘に営まれている事実から、古墳時代末期には天竜川の沖積台地に住居が存していたことを物語ってくれる貴重な存在となった。

また、ここで、福島遺跡の状況を参考までに紹介してみる。Ａ地点からは土師・須恵・灰釉を出土する住居址６軒が発見された。陶器のほかに刀子・釘・鉄鏃・などの鉄製品が、Ｂ地点で第16号住からは、鉗子・刀子・フイゴの口などが、17号では鉄鏃・釘などが出土した。Ｃ地点では７～10号住からは鉄斧・刀子・金交具・鎌・帯先金具などが、11～15号住の５軒からは刀子・石帯・鉄鏃・鉄斧・釘・鎌など11点が検出された。現在伊那市内では奈良・平安時代の遺跡から17軒もの住居址が発見された例は今まででは知られていない。こうした奈良・平安時代の村もこの期で消滅している事実から、現在の天竜川の沖積台地に中世の村は移っていったことを、立証してくれる地域として福島遺跡は注目しなければならない遺跡である。



第19図　調査範囲平面（1／1,000）及び調査実測図

第Ⅴ章　調査の概要

調査場所は、位置図に示されている。伊那市福島地区の1979番地の位置である。

調査の対象となった面積は東西153m、南北80m、12,250㎡内を調査した。調査は第１・２トレンチを設け幅1.5m総延長71m、面積1065㎡、深さ平均60cmを調査した。また調査区域内になるべく均等に渡って、間隔10mを基準にして２×２mのグリッドを37基設定して、テフラ層に至るまで調査を行った。その結果、調査区域内からは遺構として考えられるものは確認できなかった。

この調査地区は段丘上としては平坦な場所で、その高度差は715～716mで、その差は北側が高く南側が１m低い場所であった。

調査地の南側道路との間188mは高低差14m、斜傾角度は９°30'とやや傾斜を有していることと、この地帯が勇水のある凸凹の多い場所であるところから、今回は住居地としては不適格地として調査対象からは除外した。以上調査の概要を述べ報告としたい。

《参考文献》

上伊那教育会	「先史及び原始時代の上伊那」	1926
上伊那教育会	「上伊那誌」歴史編	1965
伊那市史刊行会	「伊那市史」歴史編	1974
諏訪郡富士見町	「曽利」	1978
千曲川水系古代文化研究所	「編年」	1980
長野県史刊行会	「長野県史」考古資料編全1巻（三）	1981
日本考古学協会	「日本考古学辞典」	1981
瀬戸市民俗史料館	「研究紀要」1	1982
小学館	「縄文土器大観」	1989
伊那市教育委員会	「小黒原・伊勢並遺跡」	1992
伊那市教育委員会	「上ノ山遺跡」	1993
（地形・地質関係）		
伊那市教育委員会	「小黒原・伊勢並遺跡」P.9～32	1992
伊那市教育委員会	「伊勢並遺跡」P.6～13	1993
伊那谷自然友の会	「平地林が残る断層三角地帯（伊那谷自然52号）」P.10～12	1994

あ と が き

平成4年度、市内遺跡分布調査実施に伴い、ますみケ丘地籍と福島地籍の試掘を伴う詳細調査が行われました。福島は福島遺跡という大遺の近くでしたが遺物の出土もありませんでした。しかし、ますみケ丘では平安の住居址が2軒確認でき新発見地となり、「舟窪西遺跡」となりました。

それら成果が今回この報告書にまとめられました。発掘の成果はもちろんのこと、地形地質の節・歴史的環境の節での成果を今後の社会教育活動に役立てて行きたいと考えております。

最後に、調査団長の友野先生を初め、調査員の松島先生、寒い中頑張っていただいた作業員の皆さん、そして調査にご理解をいただいた地元の皆さんのお力で今回報告書を発行することができました。この場をお借りして感謝申し上げ、お礼のことばといたします。

写真図版

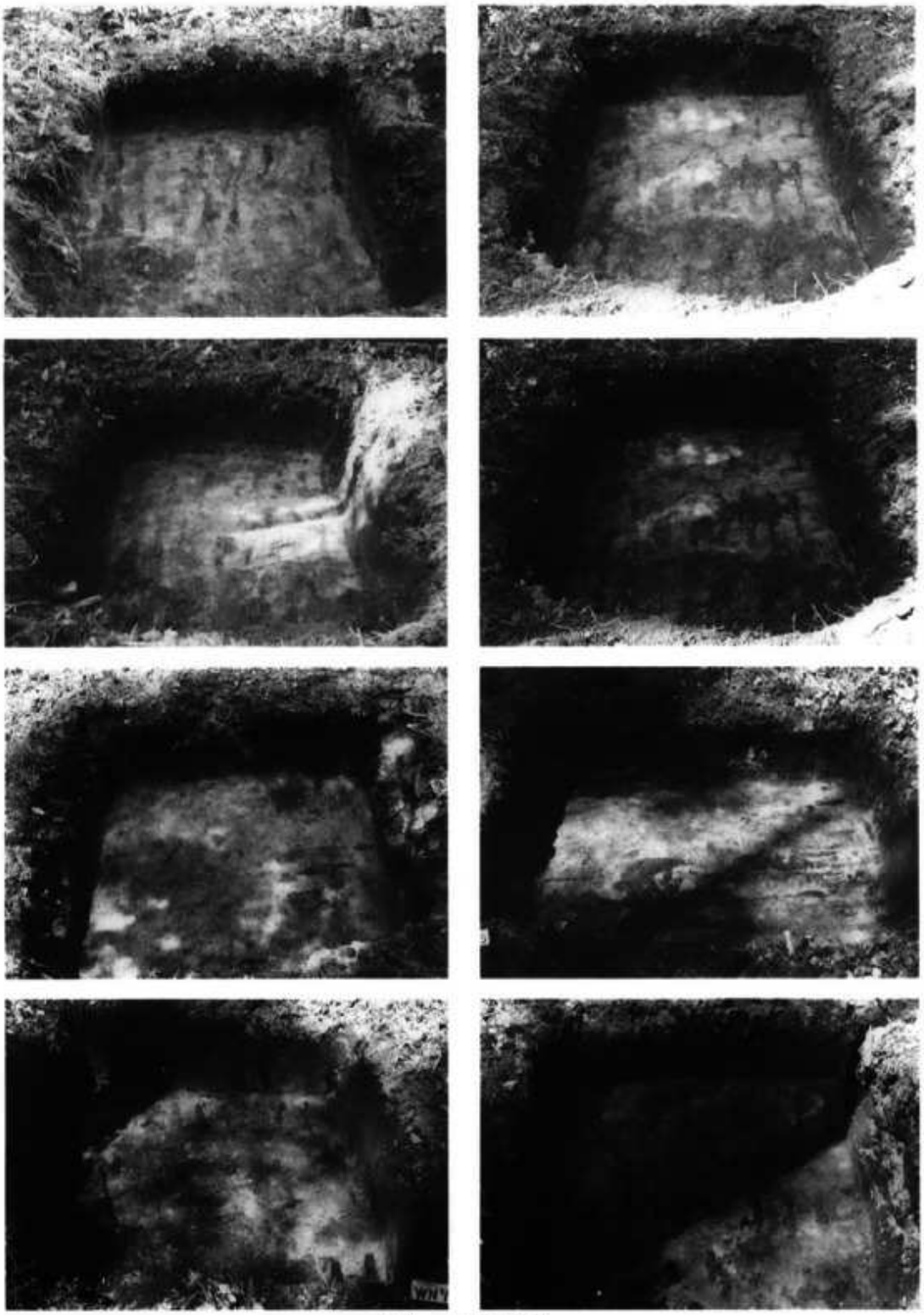
図版13

調査か所風景

第1号トレンチ

第2号トレンチ

図版14



グリッド調査状況

1、ES1　2、EN1　3、EN2　4、WN4
5、WN5　6、WN6　7、WN7　8、WN8

ますみヶ丘・福島地籍
（舟窪西遺跡）

―― 分布調査報告書 ――

平成6年3月 発 行

発　行　伊那市教育委員会

印　刷　㈱プリンティアナカヤマ